

肝心なことは語らない

宮 本 陽 子

0

初めて手にした小説作品を読むとき、わたしたちは小説内の出来事に気を取られるあまり、それが書かれたものであること、あるいは、語られたものであることを忘れがちである。そのことは、わたしたちがある作品を紹介する場合、作品内の出来事のあらましを説明することがほとんどで、誰がどのように語っているかを説明することが少ないことから了解される。フローベールの『ボヴァリー夫人』について、凡庸な田舎医者⁽³⁾の妻が書物に描かれているようなロマネスクな恋に憧れたために転落する悲劇、という具合に要約することがあっても、物語の冒頭に登場する語り手の「僕たち」⁽³⁾がその後どこにどのように捨象されるのか要約するような「あらすじ」はない。小説を面白おかしく読むためには、それが誰かに語られたものであることなどむしろ忘れながら読む方が適切であると言えるだろう。文字どおり、読んでいることを忘れさせてくれることが小説の醍醐味なのかもしれない。しかし、読んでいることを忘れさせてくれた小説をもう一度読み直すとき、わたしたちは出来事の起承転結よりも、それがどのように語られているかということに注目せざるを得ない。消費するために小説を読むわけではないわたしたちは、「恋愛詩を求めて音楽を愛し、情熱的な刺激を求めて文学を愛する」⁽³⁾だけではないからだ。新たな読み方で読むことによって、小説は

新しい様相を見せる。そして、それは最初に読んだもの、読んだと思っていたものを、鮮やかに裏切る。この驚きを求めて、わたしたちは小説を読みたい。

おそらく、あらゆる小説作品はテクストの表層の下にこうした驚きを隠しながら書かれているのであろうが、ここでは、さしあたり三つの作品を選んで考察したい。

まず最初は、一九二五年に出版されたフランシス・スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』、二作目は、一八四七年に出版されたエミリー・ブロンテの『嵐ヶ丘』、最後は、一九一三年に新聞紙上に連載され、翌年の一九一五年に本として出版された夏目漱石の『心』である。

いずれも語り手が登場人物になっていて、語り手としても登場人物としてもかなりの曲者であり、出来事を語るスタンスは大きく異なるが、自らが主張するほど正直ではないという点は共通している。この共通点は、ほとんどすべての小説の語り手＝登場人物がそうであるように、「自分が語りたくないことは語らない語り手」であり、「物語のことは、究極において「わたし」を語ることだから」という点に由来する。

語り手の「語りたくないこと」が隠蔽されている場合、そしてそのことに読み手が気づかない場合、あるいは気づいても無視する場合、物語のありようはまったく別の展開を見せる。もつとも顕著な例がブラム・ストーカーの『ドラキュラ』だ。ここでは、複数の登場人物＝書き手による手記や手紙の寄せ集めという体裁でドラキュラ退治が語られる。東欧からロンドンにやってきたドラキュラに身近な女性を狙われた男性たちがアムステルダム大学名誉教授ヴァン・ヘルシングのもとに結集し、ドラキュラから女性を守ろうとする、女をめぐる男の戦いという表層の下で、隠蔽された同性愛的欲望が蠢めいている。

『ドラキュラ』からブンガク』の著者武藤浩史によれば、オスカー・ワイルドの同性愛有罪判決スキャンダルから二年後の一八九七年に出版されたこの小説において、同性愛的欲望をあからさまに描くことは危険であった。武藤は、物語の始まりの部分でランシルヴァニアのドラキュラの城にロンドンの法律事務所からやってきた若いイギリス人ジョナサン・ハーカーに対するドラキュラの欲望を、ストーリーカーの「創作ノート」を援用しながら明快に暴く。「創作ノート」に書かれていた「この男はおれものだ、おれはこの男が欲しい (This man belongs to me I want him)」というドラキュラのセリフは、本文においては「この男はおれものだ」というセリフのみに書き換えられるが、ドラキュラは欲望を実行に移し、意識を失ったハーカーの血を吸ってしまう。^(六)新妻昭彦訳・丹治愛注釈の『ドラキュラ』においても、「創作ノート」からのこの表現が本文に復活され、訳文となり、さらに注が加わることで、ロンドン版が削除したドラキュラのハーカーに対する欲望が暴露されている。^(七)いっぽう、わたしたちの手許にあるノートン版や平井呈一の翻訳にはこの言葉はなく、明示されない欲望と出来事を読者は想像するしかない。

もちろん、ドラキュラと三人の女吸血鬼の会話を聞き、翌朝、柩の中で眠っているドラキュラの唇が血で濡れているのを目撃するハーカーは（読んでいるわたしたちも）、自分が夜の間に血を吸われたことを認識してしかるべきなのであるが、しかし、ノートン版のハーカーはそれを認めない。物語はこの事実を明白にしないまま進んでいく。あたかもドラキュラの狙いはルーシーと彼女の友人でジョナサンの妻ミーナという二人の女性だけであるかのように、ヘルシング教授もジョナサン・ハーカーもふるまい続ける。疑惑は置き去りにされたまま、というより無視されたまま、ゴッド・ファーザー的ヘルシング教授のもとに結集したホモ・ソーシャル集団が一致団結して女性を守るためにドラキュラと戦い続ける。フランシス・コッポラの映画「ドラキュラ」（一九九二年）もこうしたコンセプトが美しい画像となり、ドラキュラとミーナの恋という奇想天外な異性愛のテーマまでが加えられている。「創作ノート」に

においてドラキュラとヘルシング教授の間でその所有を巡って争われていたのは若い男女両性であったのが、ノートン版とコッポラにおいては若くて美しい女性のみに限定される。ドラキュラの異性愛がコッポラにおいて強調されるのはすでに述べた通りだ。

『ドラキュラ』の決定稿がこのように同性愛的欲望を隠蔽・削除していることが、当時の政治的状況という作品の外部によるものであるとしても、そのことが読者にストレスを与えることなく、むしろ多くの読者を満足させるような単純明快な読解を提起し、皮肉にも、むしろこの読解が定着していることは興味深い。ドラキュラ退治は、繁栄の頂点を極めた後の凋落を怖れ、新興勢力を排除しようとする大英帝国にとつてのみならず、内部の美しいもの、善きものを守るために一致団結して、外部の邪悪な力を排斥しようというイデオロギーにとつて格好のテーマである。しかし文学テキストはこうした単一方向への収斂を裏切りつつ展開してゆく。

父権的なホモ・ソーシャルの外見に覆われた『ドラキュラ』という作品に同性愛的欲望を察知することはできるが、武藤、あるいは新妻・丹治のように「創作ノート」に遡らなれば、ドラキュラがハーカーの血を吸ったことを確信する保証はない。しかし、この確信があつてこそ、テキストは西欧的知性を結集したホモ・ソーシャル集団による、非西欧的世界から侵入してきた悪の退治という一元化を免れる。

『ドラキュラ』は本稿の傍証として挙げるに留めるが、ロンドン版やノートン版において作者の削除によって隠蔽されるのが、話者ジョナサン・ハーカー自身の同性愛的体験であることを留意しておきたい。ホモ・ソーシャルがホモ・セクシャルを隠蔽するというのは珍しいことではない。ホモ・ソーシャルがホモ・セクシユアルを隠蔽していると思われる『グレート・ギャツビー』から論じていきたい。

I 『グレート・ギャツビー』

1 ギャツビーとトム

『グレート・ギャツビー』（一九二五年）は、ジェイ・ギャツビーという成金アウトローが五年前の恋人デイジーを大金持ちの夫トム・ブキャナンから奪い返そうとして失敗する悲劇的な顛末を、隣人ニック・キャラウェイが共感を持って語る、という一見他愛のない物語の体裁をとっている。たしかに、タイトルの「グレート」という形容詞はギャツビーという主人公の過度にロマンチックな恋愛や劇しい生き方への賛美に捧げられた物語であるかのように予想させる。

じつさい、華々しいドラマティックな出来事のヒーローは紛れもなくギャツビーである。物語の終わりの方で、「誰も彼も、かす・み・た・い・な・やつらだ」、「みんな合わせても、君一人の値打ちもないね」、というのが隣人で語り手のニックが失意のヒーローに投げかける、最初で最後の賛辞である。とはいえ、そのあとすぐに「始めから終わりまで一貫して、彼という人間を是認することはどうしてもできなかった」という注釈を入れるのを忘れない。すでに物語の最初の部分でニックはこのアウトローについて「僕が掛け値なしに軽蔑するものすべてを、そのまま具現したような存在だった (Gatsby who represented everything for which I have an unaffected scorn.)」と述べていた。物語はギャツビーの死後、中西部に帰ったニックが二年後に書いたという設定である。一九二二年の春に中西部から東部にやってきたニックがギャツビーと知り合い、「ノルマンディーあたりの庁舎として使われている館を、寸分違わず模倣して作られたような屋敷」の「大理石造りのスイミング・プール」に浮かべたマットの上で死体となったギャツビーを

発見する夏の終わり、そして執筆している現在に至るまでの時間を、ギャツビーに対する否定を基調とし、彼への愛惜に心を突き動かされながらニックは想起する。ギャツビーにいかなる「値打ち」を認めようとも、彼はニックの全面的なヒーローではない。ニックが明確に表現したように、ギャツビーはどこまでも相容れない価値を体現する人物だったからだ。ギャツビーが体現する価値に対する軽蔑と、しかし、ギャツビーだけが担うことができるロマンチックな力に対する憧れの相剋が、ニックの語りのなかで醸成され、物語となる。

狂騒の二十年代と呼ばれる時代が背景になっていることから明白のように、ギャツビーは禁酒法に乗り、「ニューヨークとシカゴで、ぱつとしないドラッグ・ストアを片端から買い上げて、大っぴらにエチル・アルコールを売って」、⁽¹¹⁷⁾ 巨万の富を築き上げたギャングの一人だ。「わたしの家はなかなか見栄えがするだろう? (My house looks well, doesn't it?)」とニックに同意を求めるギャツビーと同じく大金持ちで、「なかなか良い家だろう (I've got a nice place here)」と豪邸を誇るトム・ブキャナンはしかし、貧農の両親を持つギャツビーと違い、きわめて裕福な一族の出であり、ニックと一緒にイエール大学を卒業し、「東部に移ってきた今では、誰にはばかることもなく、息を呑むような派手な生活をして」⁽¹¹⁸⁾ いる。卒業後はボロ競技に夢中になっているトムは、在学中、「イエール大学のフットボール史上もつともバワフルなエンドの一人として鳴らし、全米にその名を轟かせた」⁽¹¹⁹⁾ 人物である。

いっぽう証券マンとなったニックも大学生時代は、『イエール学生新聞』に、「おそろしく生真面目で、いささかわかりきった内容の連載論説を寄稿していた」⁽¹²⁰⁾。彼はトムほどではないものの、「三代にわたって、中西部の都市ではないささか名を知られており、暮らしぶりも裕福」で、「キャラウェイといえbachよつとは名を知られた家柄」⁽¹²¹⁾ という育ちの良さだ。「四年生だけが入会できる一種のエリート秘密クラブ」⁽¹²²⁾ の会員であったニックとトムの二人はいずれも、一流大学で誇らしい学生生活を謳歌したエリートたちである。

これに対しギャツビーは、屋敷内に設えた「マートン学寮風」⁽¹⁰⁾図書室の書棚に「正真正銘の書物」⁽¹¹⁾を幾段も並べたり、会話の語尾に「オールド・スポーツ (old sport)」というオックスフォード風の呼び掛けを執拗に付けたりして、オックスフォード大学に通っていたという触れ込みを信じ込ませようと懸命であるが、そのことをニックに伝えるジョーダン・ベーカー本人が「あの人がオックスフォードに行ったとはとても思えない」と言い、パーティの招待客たちは「あの人、誰かを殺したことがあると思うな」等と囁き合う。ニューヨークのトムの愛人マートル・ウィルソン宅でのパーティでマートルの妹キャサリンがギャツビーについて、「怖い人よ、ああいう人に弱味を握られたくないわね」⁽¹²⁾と話し、ニックの好奇心を掻き立てる。ギャツビーに付きまとう胡散臭さは物語が進むほど増大し、「戦争中ドイツのスパイだった」⁽¹³⁾、「密造酒の商売をしている」⁽¹⁴⁾、「ヒンデンブルクの甥であり、悪魔の再従兄弟であることを見破った人を殺したこともある」⁽¹⁵⁾、とまで言われるようになり、やがて「野心的な若い新聞記者が、ある朝ニューヨークからやってきて」、直接、本人に質問までする始末だ。

このようにトム・ブキャナンとジェイ・ギャツビーはいずれも尋常ではない裕福さを誇示するという共通点を持ちながらも、極度に異なる出自のために富を与える印象は同一でない。二人ともアメリカ人らしくパーティを何度か開くが、これもまた二人の相違点を明らかにする。

ブキャナン夫妻としては二度、加えて夫トムはニューヨークの愛人宅で一度、パーティを開くがいずれも規模の大きくないものである。大きくないというのは、来ている人たちが互いに顔見知りであり、相互認識可能な規模であると言ひ換えてもよい。親密と言うには暖かみに欠けるが、出席者の人間関係が語り手ニックによって明らかにされ、それらは本人にとっても報告者にとっても楽しくないものがほとんどだ。

ニックが最初に出かけたブキャナン家のディナーでは、同席している有名なプロゴルファーのジョーダンから「ト

ムはニューヨークに愛人を囲っているのよ」と告げられ、この愛人マートルは「夕食どきに電話をかけてこないくらいのはたしなみ」が欠如している。^(二八) ニックの再従姉妹でトムと妻デイジーはニックとの再会を喜びながらも、彼女の裕福な生活の中にある欲求不満と不幸を感じさせ、彼を「居心地悪い気分」に^(二九)させる。

妻と愛人の不満を物ともしないトムはブキャナン家の支配者だ。「巨大な筋肉の塊り」によって「梃子のように強大な力をふるうことのできる身体」、「容赦を知らぬ肉体」の持ち主トム。「しゃがれたテノールのどら声」で、「傍若無人な印象を余計に強いものにしてい」るトム。「どこことなく高みから相手を見下ろすようなところがあり、たとえ好意を抱いている相手を前にしても、そのような態度」を変えないトム。「大学では少なからざる人々が、反感を持っていた」^(三〇)というトム。「人並みはずれてうすらでかくって、腕力のあり余った」「獣みたいな」トムは、デイジーの「指のつけねに青あざ」をつけてしまうほど乱暴だ。^(三一) しかし、デイジーは自身のステイタスがひたすらこの不誠実で「獣みたいな男」に支えられていることを知らないわけではない。不平不満を言いつつも、彼女は「その美しい顔に非のうちどころのない笑みを浮かべて」、まるで「なんといつても私とトムは並みではない特殊な社会（ソサエティ）に属しているのだから（as if she had asserted her membership in rather distinguished secret society）」^(三二)とでも言わんばかりの様子を見せる。この「特殊な社会」こそが終生変わらぬ絆でデイジーをトムと結びつけ、やがてギャツビーから彼女を決定的に引き離すことになるだろう。

ニックがトムに連れて行かれるマートルのニューヨーク宅でのパーティの参加者は「特殊な社会」に属するほどの金持ちではない。マートルにしてからが小さな自動車修理工場経営者の妻であり、あとは「下の階に住む」写真師マックキー夫妻、マートルの妹で「女友達と一緒にホテル暮らしをしている」というキャサリンという顔ぶれである。^(三三)「部屋」の狭さに比べて、家具があまりに大きすぎる^(三四)「アパートメントの部屋で、トムという大金持ちのパトロンを持つマー

トルは、「見事なばかりの尊大さ」や「権柄ずくなものの言い方」で「膨張し」、ニツクを驚かせる。^(三九)

マートルの傲慢さの源泉がトムであることは言うまでもない。この狭い部屋に到着する道程においても彼女は女王然とふるまっていた。「四台のタクシーをやり過^(四〇)ごしてから、新車を選ん」で美しいタクシーに乗り込むとまもなく、「あそこの犬が一匹ほしい」と言い出し、発車したタクシーをわざわざバックさせ、たくさんの子犬を首から下げた老人のところまで戻り、気まぐれに犬を買ひ求める。^(四一)マートルのわがままが気まぐれな欲望を満たすことにあるとするなら、トムのそれは自分の力を誇示することにある。「十ドルでお譲りしましょう」という売り手の言葉を無視して、トムは「ほら、金だ。これであと十匹ばかり犬を仕入れておくんだな」、と余分な金をばら蒔く。^(四二)「皮肉にも太富豪ジョン・D・ロックフェラーそっくりの」老人に有無を言わず支払われたこの不当な代金は老人の貧しさを際立たせ、相手を喜ばせるためというよりも、むしろ相手を軽蔑するためのようなものだ。^(四三)

トムが屈辱を与えるような態度を見せる相手は犬売りの老人だけではない。写真師のマッキーがトムに、「私はロング・アイランドでもっと仕事をしたいんですが、それにはつてが必要で。最初の後押しみたいなものさえあればいいのですが」と助力を求める。これに対し、トムは「マートルに頼めばいい」^(四四)彼女が紹介状を書いてくれるよ。なあ、マートル?」、とわざわざマートル経由の支援を提案する。これはマッキーに対して先ずトムの傀儡であるマートルに頭を下げるという命令であり、この集団におけるマートルの格上げと同時にマッキーの格下げとなる。

トムをボスとするこの集団はボスの下にそのパートナーを置き、パートナーにその他の者が従うことで、トムを頂点とする明確な序列が形成されている。ミセス・マッキーはミセス・ウィルソンの着ているドレスを褒め、一度はマートルから「蔑むように肩を上げ、賛辞を一蹴」されるものの、やがて、「このドレスね、いらなくなったらすぐにでもあなたにあげるわ。明日には新しいドレスを買うつもりだから。そうだ、必要な買い物のリストを作っておかなくつ

「ちゃ」^(四一)、と氣前の良い返事をもらうことになる。トムの富が女性パートナーからその部下へと流通する。しかし男性はスモースにこの流通のシステムに入ることができない。男性にはボスかそれ以外かの選択しかないようだ。一匹のオスをボスとする動物の集団がそうであるように、トム以外の男性は男性として認識され得ない。トムに連れてこられたニックも同様だ。女性たちは自分たちに言い寄った男性たちの悪口を言い散らし、マートルは自分が夫を愛したことがないとささ言い張る。そのために、彼女は無関係なニックを引き合いに出す。

「あたしがあの男に夢中になったことなんて、一度だってあるもんですか、それはね、ここにいるこの人に夢中になったことがないっていうのと同じくらい、はつきりしている」^(四二)

彼女は唐突に僕を指さし、みんなは責めるような視線をこちらに向けた。

この一言でニックは彼女の夫ウィルソンと同列に並べられてしまう。ここで男性と看做されるのはトムただ一人、マッキーもニックも子供のようにあしらわれ、男性として認知されていない。トムからも彼に従う女性たちからも。しかし、序列がつけられるのは狭いアパートメントの内部だけではない。序列は社会一般に拡がっていく。

トムという「特殊な社会」^(四三)の人間を中枢に得た、ニューヨークのこの中産階級の社会（ソサエティ）は自分たちよりも「下の階層」^(四四)を見下すことで活気づく。頼んだはずの水をボーイがなかなか持ってこないと、「マートルは下々（the lower orders）のだらしない」腹を立て、「まったく、あの連中^(四五)つたらね！（These people）休みなくがみがみ言っでなくちゃ動かないんだから」、と悪口を言い、ミセス・マッキーは「何年ものあいだ」彼女を追ひ回していたという「ちびのユダ公」^(四六)との結婚を回避した功績を誇る。みんなが「ルシール、あの男はあんたよりずっと下の階層の人間なのよ！（that man's way below you）」^(四七)と止めてくれたというのだ。いっぽうマートルは、かつて「紳士（a gentleman）のように思え」、「礼儀作法を心得た人に見えた」のに、今では「本当はあたしの靴をなめるにも値し

ないようなやつ」^(四八)と罵つてはばからぬ現在の夫チエスター・ウィルソンと結婚してしまつたことをひどく後悔している。要するに、「初めてのいい人^(四九) (the first sweetie)」であるトムと結婚すべきであつたと言いたいのだ。ところが血氣盛んなマートルはやがて、デイジーのことで「初めてのいい人」と口論になる。力を持て余すトムは彼女の顔を「力まかせに打」ち、彼女の鼻をつぶし、余剰の血を流させる。^(五〇)アパートメントに着いてすぐ、ニッケが煙草を買いに行っている間に抱き合つてから間もない二人であつたが、彼等の流血の惨事がニッケと写真師マツキーをパーティーから退散させ、ミセス・ウィルソンのいつまでも止まらない鼻血が後になつて、夫に浮気を疑わせることになるだろう。

ブキャナン邸の「特殊な社会」のパーティーにおいても、トムの愛人宅の上昇志向の強い中産階級のパーティーにおいても、濃厚過ぎる人間関係がニッケを辟易させるが、それはすなわち、ジョーダンの言うとおりに、「小さなパーティーだと、プライバシーつてもものがない」^(五一)からである。

いっぽう、ギャツビーのパーティーは大がかりなものだ。隣人のニッケやジョーダン以外は、「ほとんどの人々は招待されてもいなかった」^(五二)「勝手にやつてきた」^(五三)見ず知らずの人たちで、ギャツビーはこうした連中を大勢集めて、もてなしているのだ。アメリカの物質文明の繁栄を象徴するかにように、彼は「ロールズ・ロイス」を「乗り合いバス」代りに往復させて客を迎え、モーターボートや水上スキーで楽しませ、ご馳走とシャンパンで歓待する。彼の散財の目的はただ一つ、五年前に別れた恋人デイジーに再会することであつた。デイジーは軍人として戦地に送られたギャツビーを待ちきれずにトム・ブキャナンと結婚し、ギャツビーの屋敷の対岸の豪邸に暮らしている。ギャツビーは大がかりなパーティーを開くことで、いつかデイジーが来てくれるものと期待しているのだ。パーティーに押しかける大勢の客はホストの顔さへろくに知らず、また彼の方でも彼等に興味があるわけではない。ジョーダンは「大がかりなパー

「テイが好きな。ほっとできるから」、という理由でギャツビーのパーティに通い、ルシールという娘は「余計なことを考えなくていいし、そういうのって楽しい」から「ここに来るの」が好きだと言う。しかし、このルシールが、「この前ここに来たとき、椅子にひっかけてイヴニング・ドレスを破い」てしまい、その後、「一週間もたたないうちに二百六十五ドル」もする有名店の「新しいイヴニング・ドレスが箱入りで届けられた」ことを話すと、話題は送り主の胡散臭さへと展開していく。トムの過剰な金銭が他人に有無を言わせないものであるのに対し、ギャツビーの過剰な金銭は他人の好奇心を掻き立て、「そういうことをする男の人って何か変よね」とか「あの人、誰かを殺したことがあると思うな」、といった疑惑を引き起こす。^(五七) プライバシーのない小さなパーティを嫌う人々が、彼らを歓待するホストの後ろ暗いプライバシーを話題にする。ホスト一人が客たちに蔭口を言われるためにプライバシーを提供しているかのようなのだ。

なぜ、トムの莫大な金銭は他人を羨ましがらせ、黙らせることができるのに、ギャツビーのそれは悪口の種になるのか。なぜ、犬一匹のために十匹分の料金を払うことは馬鹿にされず、破れたイヴニング・ドレスの代償としてより高価なドレスを送ることが疑惑のもとになるのか。いずれも豪邸に住み、派手な高級車を乗り回し、規模は違うもののパーティを何度も開き、金銭をばら蒔く二人のやっていることは、遠目には大して変わらない。もともと語り手ニックスはトムの態度にむしろ批判的であり、ギャツビーのいかがわしい噂に対しては懐疑的であるようだ。ニックスはギャツビーの謎について納得できるような説明がされるのを期待しつつ、魅了されているようでもある。ニックスにとって、口さがない連中が「ひそひそ声で噂をするということ自体、ギャツビーがロマンチックな憶測を盛大にかき立てていることの証左」^(五八)であった。

じつさい、種明かしはジョーダンとギャツビー自身の口から五回に分けて語られることになるだろう。そこで語ら

れるギャツビーのこれまでの波乱万丈のロマンチックな人生を別にすれば、これを語る現在の彼はトムの派手で大がかりなカリカチュアのように見えなくもない。代々の相続によつて富豪であることが正統であるとすれば、財産相続を経ずに自らの能力によつて富豪に成り上がることはそのカリカチュアとなる。ニツクがギャツビーを「トリマルキオ」に例えるのも偶然ではない。並外れた富はこれを持たない人々に恐れと不安、羨望と不快感を掻き立てるが、そのカリカチュアに対してはここに軽蔑が加わる。

フィッツジェラルドは金遣いの荒い人物を何人も描き出したが、もっとも強大な富を所有する人物は、短編「リッツ・ホテルほどもある超特大のダイヤモンド」(一九二二—一九二三年)に登場するブラドック・ワシントンに違いない。この人物はジョージ・ワシントンとボルティモア卿の「直系の子孫」^(六二)にあたる名家の出とはいえ、いかがわしいところもある人物だ。ブラドックの家は彼の父の代に、地図にない「超特大のダイヤモンド」の山を手に入れて成り上がり、現在、ブラドックはその山に豪邸を構えている。

主人公ジョン・T・ウインガーも地方の裕福な名家の息子であるが、夏休みに学友パーシー・ワシントンの実家に招かれた彼は、この家の法外な富と大富豪ブラドックの「容赦なく苛酷になりうるあの傲慢不遜な態度」と「ひたすらに自己本位の傾向」^(六三)に圧倒される。じつさい、ブラドックの父は一族の財産を危険に晒しかねない弟を殺害しているし、秘密漏洩を恐れるブラドック自身も、息子や娘が招待した友人たちをすべて殺害し、飛行機で邸宅を発見した者たちを監禁している。領地の発覚という事件さえ起こらなければ、主人公ジョンもそれまでの招待客同様、あっさり殺されたはずだ。不当に監禁されているのは侵入者だけではない。ブラドックの父は黒人奴隸たちが「奴隸制が廃止になったことを知らなかった」のを良いことにして、南軍の勝利を信じ込ませ、^(六四)「北部へ連れていった」^(六五)。そして

その子孫たちを、ブラドックは第一次大戦以降も奴隷として使っている。

やがて、地図にない治外法権の領地の存在が脱走者の通報によつて暴かれ、多勢の軍隊に包囲され、逃げ場を失うと、ブラドックは「黒人二人がやつとのことだ」^(六六)持ち上げることができるとの特大のダイヤモンドを神に捧げ、神との「取り引き」^(六七)を試みる。もちろん、神は賄賂を受け取らない。買収に失敗した彼は自爆によつて城館と共に滅び去る。ここにおいて、桁外れであるということがある種の不道德さと結びつき、ブラドックの悲劇はいささか滑稽の色を帯びる。

鉦山王ブラドック・ワシントンの「氣ぐらいが高く茫洋とした顔 (a proud, vacuouse face)^(六八)」は、ジェームズ・ギャッツをジェイ・ギャツビーとして再生させる鉦山王ダン・コーディーの「厳しく、表情が欠けた顔 (a hard empty face)^(六九)」の先触れであり、ブラドックの桁外れであることの不道德さと滑稽さが、資産家のトムと成り上がりのギャツビーに共有され、発展を見せる。

もちろん、『グレート・ギャツビー』においては、もはや主人にかしづく黒人奴隷の姿はない。しかし、「光を反射して黄金色に輝く」窓がずらりと並ぶ、家の正面を背景に、「乗馬服に身を包」み「両足を開いてフロント・ポーチに立つた」^(七〇)姿で登場するトム・ブキャナンは、「照りつける太陽のもと」、「氣ぐらいが高く」、「がっしりした体軀の持ち主」で、「朝のうちは馬の匂いを発散させて」^(七一)現れるブラドック・ワシントンの子孫のようだ。

似ているのは体格と傲慢さだけではない。いずれも恥じることない人種差別主義者である。奴隷たちに毎日の入浴を強制したときに、風邪による死者が出たことをブラドックは面白おかしく語り、「人種によつては水が害になる場合もあるようです—まあ飲むのは別として」^(七二)と結ぶ。この冗談を喜んだジョンは声を立てて笑う。

トム・ブキャナンは自宅のパーティで、『有色帝国の興隆』という本を引用しながら、自分たち「北方人種」が覇権を守るのは「支配民族である我々の責務だ」という演説をぶつ。彼の「どこか切羽詰った」、「まるで自己満足だけではもはや事足りないといわんばかりの」大仰な演説は妻デイジーとその友人ジョーダンの顰蹙を買うが、彼は女性たちの嘲笑を意に介さない。台頭しつつある有色人種や成金から自らのステイタスを守ろうとするのは、彼にとつては当り前のことだ。

彼の考えは最後まで変わることがない。物語の終わりの方で、妻のデイジーが目の前でギャツビーに愛を囁くのを自宅で目撃してから怒りを抑えることができないトムは、ニックとジョーダンを伴い五人でやって来たプラザ・ホテルの一室で、妻と恋人の二人を糾弾して言う、「どこの馬の骨ともわからん男 (Mr. Nobody from Nowhere) が自分の女房に手を出すのを、ただ座視しているのが当節のやり方らしいな。(……) ・ ・ ・ 昨今、家庭生活やら家族制度やらをないがしろにする輩が増えてきたが、そんなことをしているようじゃ、世の中の何もかもめちゃくちゃになって、今に黒人と白人とが平気で結婚するようなことになってしまうぞ」。(七四) 混乱する頭が「どこの馬の骨ともわからん男」と「黒人」、道徳と差別を一つにする。「特殊な社会」から妻を奪おうとする「どこの馬の骨ともわからん男」は、「白人」と結婚しようとする「黒人」の比喩となる。これはトムとギャツビーを決定的な対立に導く伏線となるものであるから、深刻な場面であるにも拘わらず、ニューヨークの愛人のことを知っているグループ内での発話であるだけに滑稽さを逃れない。しかも、このホテルに来る途中で、愛人マートルの夫ウィルソンの修理工場に立ち寄ってガソリンを入れた際に、ウィルソンが相手を持定してないものの、妻の浮気に気づいたことが判明したばかりであるから、なおさら深刻で滑稽だ。ニックは、「ここにいるのはみんな白人ですけどねえ」と囁くジョーダンに賛同し、トムへの怒りを共有する。「僕はみんなと同様、立腹していたが、それでも彼(トム)が口を開くたびに吹き出したい

気分にかられた。道楽者から道学者への見事な大変身ではないか^(七)。ニツクの言う「みんな」とはトム以外のみんな、すなわち、ギャツビー、デイジー、ジョーダン、ニツクの四名である。道徳と差別主義を振りかざし、出自の異なるギャツビーを不当に貶めるトムを、ニツクは父親仕込みの「人間の基本的な良識^(七)」の見地から多数派の代表として弾劾し、笑ひ者にするのだ。

トムを嗤うニツクは、しかし平等思想の持ち主ではない。彼はギャツビーの車で、ニューヨークまでランチを食べに行く途中、「話題というものをろくすっぽ持た^(七)」ないギャツビーが、自分に関する「噂話」を打ち消すために彼の人生について話すのを聞く。「君には神かけて真実を話そう」と大仰な仕事を添えて、彼が「一家の伝統」として「教育はオックスフォードで受けた^(八)」と言いながら、サン・フランシスコを中西部と言ったり、「真剣そのもの」の顔で、家族の死を「莊重さを帯びた^(九)」声で語ったりするのを、ニツクは心の底で存分に嘲笑う^(八)。

さらに、「運転手が白人で、客席には当世風のなりをした三人の黒人が座つてい^(九)」る一台のリムジンとすれ違ふが、車の中の黒人たちが「いかにも尊大に、対抗心をむき出しにしてこちらを睨み、どんぐり眼をくりくりさせたので^(一〇)」、彼は「思わずふきだしてしまつた^(八)」、と黒人差別を隠さない。物語の冒頭で、「誰かのことを批判したくなつたときは、^(八)」世間のすべての人が、お前のように恵まれた条件をあたえられたわけではないのだ^(八)」ということを考えろ、という父親の教えを引用し、「人間の基本的な良識や品位は、生まれながらに公平に振り当てられるわけではない^(八)」とそれを肯定するニツクであるが、自身のような出自と教養を持たない人間、アングロ・サクソン以外の人種に対する彼の眼差しはやさしくない。

ニツクの語りは、トムの常識を欠いた言動に反感を覚えつつも、そしてまたギャツビーの悲痛なまでのひたむきさ

に惹かれつつも、究極においては、トム側の身を置く自らの立場を暴き出す。野間正二がスコット・ドナルドソンを引用しながら指摘しているように、ニックがマートルを轢き逃げ犯人としてデイジーを告発しなかったのは、マートルが「自分よりも下の階級に属する人間だった」^(八五)からだ。

先に引用したブラザ・ホテル内でのトムによるギャツビーに対する攻撃とそれに続く二人の激しい対立、そしてギャツビーの敗北に冷静さを失ったデイジーはホテルからの帰り、トムに命じられるままに、ギャツビーと二人で彼の黄色い車に乗り、「運転すると気が落ち着くから」^(八六)とハンドルを握る。二人が乗った黄色い車はギャツビーのものであるが、ホテルに向かうときはトムが運転していた。行きのトムがこの車で給油に立ち寄ったのを二階から見ていたマートルは、帰りのトムが運転しているものとは思い込んでいた。そのため彼女は、無理やり引越そうとする夫からトムの元へと逃れようと黄色い車に全力で突進し、止まらない車によって「力づくで生命を断ち切れ、路上にひざまずくような姿で、どろりとした黒い血を地面に染みこませて」^(八七)死んでしまった。ニックは毛布にくるまれた遺体を確認してはいるものの、彼女の死の場面を目撃したわけではなく、ウィルソンの友人で目撃者のミカエリスの証言を聞いただけだ。「左の乳房がもげてぶらぶらし」、「口はかっ大きく開かれ、その両端が裂け、まるで、長年にわたって溜め込んできた恐ろしい量の活力を一度に吐き出そうとして、それがつかえたみたい」な激しい死に方である。^(八八)ニックは彼女の生命を奪った犯人がデイジーであることを知っていた。そして、轢き逃げの「死の車」^(八九)がギャツビーの所有であることをトムが被害者の夫ウィルソンに教え、そのためにギャツビーが逆上したウィルソンに殺されたことに憤慨していた。それなのに、どこまでも沈黙を守り、轢き逃げ犯の濡れ衣を着せられたギャツビーの名譽を救おうとしなかった。しかも、トムは最後までマートルを轢き殺した犯人がギャツビーだと信じて疑わない。デイジーはトムに罪の告白をしていなかったのだ。ニックは「真実はそうじゃないとは、口が裂けても言えないのだから」^(九〇)トム

の誤解すら訂正しないままである。事後的にマートルの死の瞬間をまるで見てきたように、冷徹に、衝撃的に書き記すのみだ。

第三章の最後を、ニックは、「世間には正直な人間はほとんど見当たらないが、僕はその数少ないうちの一人だ」^(九二)、と偉そう結んでいるが、少なくともこの事件に関しては「正直な人間」として行動しているとは言いがたい。デイジーのせいで、マートル、ギャツビー、ギャツビーを射殺した直後、その場で自殺したウィルソンの三名が無駄死にしたこの事件を「こうしてこの大惨事 (the holocaust) は完了した」^(九三)と書きながら口を拭うことが、正直な人間の行為であると容認することは不可能だ。彼の標榜する「人間の基本的な良識や品位」が最終的に、ギャツビーやマートルとチェスター・ウィルソン夫妻の生命よりも、ブキャナン夫妻、とりわけデイジーの名譽を守る方を選ばせたのである。

ギャツビーを中心にした物語は、彼がそのカリカチュアを演じていた社会が彼を狡猾に排除し、死に至らしめる物語でもある。「人間の基本的な良識や品位」の手を借りた「特別な社会」が、ロマンチックな夢見る力を不当に踏み躪る物語でもある。ニックは彼と知り合う以前に、ギャツビーが対岸にあるデイジーの家の緑色のランプに向かって、身を震わせながら両手を差し伸べる姿を目撃するが、ギャツビーの手はデイジーその人のみならず、彼女が体現する「特別な社会」の輝きと永遠に届くことのない憧れに向けて差し伸べられていたのである。

2 大人になれないニック

ギャツビーよりも少し若く、トムと同じ歳のニックは物語の最後の方で三十歳を迎えるが、彼が物語に登場したときは学生の続きのような社会人であった。というよりも、学生に戻りたい社会人と言ったほうが良いだろう。証券会

社に就職して間もない彼は、「銀行業とクレジットと有価証券についての本をひと抱え買い込み、書棚に並べ」、「た
くさんの書物を片端から読破してやろうという意欲に燃えていた」^(九四)。かつて『イェール大学新聞』に「連載論説を寄
稿していた」ことに言及し、そこに未来に繋げようとする。彼は書く、「そのような生活のあり方を、今、そっくり
そのまま取り戻し、スペシャリストのなかでもっとも数少ない、あの〈博学な人〉にもう一度なろうとしていた (and
now I was going to bring back all such things into my life and become again that most limited of all specialists, the
“well-rounded” man.)」^(九五)。ここに述べられているのは駆け出し証券マンとしての抱負というよりも、むしろ学生生活へ
の回帰願望だ。

なぜ、学生生活に戻ろうとするのか。「世界大戦」の兵役でトラウマを受けたニックにとって、「かつては世界の心
温まる中心であった中西部も、今では宇宙のギザギザな果ての断崖 (the ragged edge of the universe) のようなもの」^(九六)
になったので、東部に避難してきた彼は、ニューヨークで再び学生時代の気分を取り戻すことでトラウマを解消でき
ると思っている、あるいは思いたいからだ。学生時代の友人トムがいることも、過去の生活のあり方を取り戻すのに
都合が良い。一九一五年に卒業してまもなく「世界大戦」に巻き込まれたニックにとって、戦前の学生時代に戻るべ
き時間となる。だから「一九二二年の春に東部にやってきた」ニックは「もう故郷に戻ることはあるまいと」思っ
ていた。^(九七)しかし、彼が「宇宙のギザギザな果ての断崖」であったはずの故郷に戻って、この物語を書いていることはす
でに述べたとおりである。

じつさい、東部を安住の地にするには、その地での出発は最初からいささか頼りないものだった。彼がギャツビー
の豪邸の隣に住んだのはまったくの偶然で、「同じオフィスで働く一人の青年が、電車通勤できる郊外の一軒家を共
同で借りないかと持ちかけてきた」^(九八)から、その提案に乗ったというに過ぎず、そこにニックが一人で住むことになっ

たのは「引越し直前になってその同僚がワシントン勤務を命じられて」しまったからというだけだ。自らの意志で生活の場所や形態を決定し、準備したわけではなく、それをした人は転勤で去ってしまった。彼はここで「犬を一匹飼ったが、そいつは数日を経ずしてどこかに逃げてしまった」⁽¹⁰⁰⁾。ウェスト・エッグで彼が自ら手に入れたのは「ぼんこつ」のダッジ」と「ベッドを整えたり朝食を用意してくれたりするフィンランド人の家政婦」⁽¹⁰¹⁾だけだ。新しい土地で「一日か二日くらいは淋しい思いを」するが、彼よりも「さらに新参者である」男から道を尋ねられることで、彼は「自分はもう孤独ではないことに思い当た」⁽¹⁰²⁾る。彼にとつてウェスト・エッグが新しい「世界の心温まる中心」とならないまでも、「宇宙のギザギザな果ての断崖」にならないようにするために、その土地に根付くことを求めざるを得ない。「もう孤独でない」と感じることによつて、彼は初めて、「太陽の光はまぶしく、まるで映画の早まわしで生物の成長をみているみたいに、樹木の緑がはじけるように溢れていく」ことに気づき、「夏とともに生命がまた新たに始まるのだ」という確信に至る⁽¹⁰³⁾。

学生生活に戻るような気分で新生活を始めるニックであるが、彼自身の言動のためか、周囲もまた頭でっかちの彼を一人前の証券マンとして扱っていないようだ。

トムの家を最初に訪問したときに、勤務している証券会社の名前を訊かれ、ニックが答えると、トムから「聞いたことがないな」ときつぱりと「言われてしまう」⁽¹⁰⁴⁾。知り合つて間もないギャツビーは、ニックが「それほどの収入を得ていないのなら」、「さして手間のかからないことで、けっこうな額を」得ることができるが、「他人に口外してもらつては困る」仕事を紹介しようと申し出る。トムはニックの証券会社を馬鹿にただけであつたが、ギャツビーは彼の勤めをほとんど無視して、彼を自分の支配下に入れようという魂胆である。さらにまた、自らの後ろ暗さを自覚していないはずのないギャツビーが、ニックのような育ちの良い、少し年下の青年を身邊に置くことが自身の評判や品格

に有益であると考えなかったはずはない。ダン・コーディーから学ぶべきものを学んだギャツビーに足りないのは、デ이지ーやニックのような良家の子弟が生まれながらに備えている品の良さだけだ。パーティでギャツビーと初めて話したとき、ニックは彼を評して「エレガントだがどこかに粗暴さのうかがえる一人の若い男 (an elegant young rough-neck) ⁽¹⁰⁴⁾」と言いつた。「エレガント」さはギャツビーの自己努力の成果だ。しかし彼の出自と生きてきた痕跡としての「粗暴さ」が残っている。この「粗暴さ」さえ消えれば、デ이지ーに相應しい「特殊な社会」の人間になれるだろう、とギャツビーが望んだとしても不思議はない。しかし、育ちの良いニックは胡散臭い仕事を警戒する。ギャツビーの向上心に付き合う余裕はない。ギャングのウルフシャイムを紹介されたばかりでもあり、彼は直ちにギャツビーの申し出を断り、ギャツビーに取り込まれることを免れるが、ニックの大金持ちの友人たちは、いずれも彼を一人前の社会人とは認めていないようだ。

ニックの未成熟さはその裏返しとしての自尊心に反映される。彼は自分に対する相手の態度を痛々しいほど気に掛ける。相手が自分にどのように対応しているか、ということに触れずにはいられない。そのため常に相手の表情や態度に一喜一憂するが、彼の関心は相手に対するものというよりも、自分自身に対する関心だ。初めて訪れたギャツビーのパーティに際しても、「ギャツビーの家を最初に訪れた夜、僕は正式な招待を受けたごく少数の客の一人であつた」、⁽¹⁰⁵⁾「僕は正式に招待を受けていた」、と特権を主張する。じつさい、誰でも立ち寄ることのできるパーティであり、ホストがニックを「正式に招待」したのは、隣地にある彼の家で愛するデ이지ーと再会し、その土地から自分の豪邸を彼女に見てもらいたい、という目的のためだけであるが、それでも、ニックは自分が正統なゲストであること、他の有象無象とは違うことを強調せずにはいられない。生まれも育ちも教育も、すなわち「基本的な良識や品位」において

エリートである自分を忘れることができないのだ。

彼が一目置いてもらいたいと願うのはギャツビーのように自身も一目置いている相手からだけではない。過去においても現在も好意を持っているわけでもないトムに対してさえ、トムが彼をどう思っていたか、どう思っているかを気にせずにはいられない。「お互いにまだ親しくもないうちから彼（トム）は僕を認め、彼一流の粗野な突っかかるようなやり口で、僕の好意を露骨に要求しているような印象をしじゅう僕は受けていたものだ」、とニックは書く。

自らは行動の人でなく、トムやギャツビーのような金持ちでないニックは、自身の「基本的な良識や品位」に対して敬意を表されることを切実に求めているのだ。そのため、デイジーの話を聞いているうちに「彼女の語った話に含まれている基本的な不誠実さに」気づかされたニックは、「今夜の集まりそのものが、僕から彼女にとって都合のいい感情を引き出すために拵えられた、ある種の巧妙な仕掛けがあったのではあるまいかという気がした」こと（二二〇）でひどく傷つく。だからこそ、楽しかったとは言えないブキャナン家のパーティの最後に、見送りに出てきたトムとデイジーが、彼の婚約について訊ねたのを否定しながらも、ニックは、「二人がぼくにそれほど関心を持ってくれていることは嬉しかったし、相手は自分なんか足元にも及ばない金持ちなんだという気後れみたいなものも、おかげでいくらか薄れた」、と気分を直すことができたのだ。（二二一）

デイジーとの再会という確固とした目的のあるギャツビーは、ニックの心を獲得することに慎重であった。勤務先の証券会社を馬鹿にすることで、久しぶりに再会したニックの自尊心を最初から打ち砕いたトムと違って、ギャツビーは大金持ちであるにも拘らず、粗末な隣家に住んでいるニックを丁重に扱った。「緑がかった淡青色の制服を着た運転手」に「おそろしく堅苦しい書状」を持たせてニックを「正式に招待」した（二二三）。このことがニックの自尊心を満足さ

せたことはすでに述べたとおりだ。ギャツビーはさらに上手に、初対面のニックを喜ばすことにも成功した。パーティー会場でいささか退屈気味のニックに、同じテーブルにいたギャツビーは名乗るより前に、戦争中にニックの顔を見たことがある、と話しかけた後、自分がホストであると明かして微笑む。この微笑みに魅入られたニックは過大に感激する。

まったくのところそれは、人に永劫の安堵を与えかねないほどの、類い稀な微笑みだった。そんな微笑みには一生のあいだに、せいぜい四度か五度ぐらいしかお目にかかれないはずだ。その微笑みは一瞬、外に広がる世界の全景とじかに向かい合う。あるいは向かい合ったかのように見える。それからぱつと相手一人に集中する。たとえ何があろうと、私はあなたの側につかないわけにはいかないですよ、とでもいうみたいに。その微笑みは、あなたが「ここまで理解してもらいたい」と求めるとおり、あなたを理解してくれる。自らがこうあつてほしいとあなたが望むとおりのかたちで、あなたを認めてくれる。あなたが相手に与えたいと思う最良の印象を、あなたは実際に与えることができたのだと、しっかりと請け合ってくれる。そしてまさにそのポイントにおいて、微笑みは消える——

(二四)

たしかにギャツビーは魅力的な人物であつた。ギャツビーが、名乗り合う前からすでに戦争中の記憶で彼を認識してくれたこと、そしてうつとりするような微笑みを向けてくれたことが、ニックを有頂天にさせたのだ。しかし、感激は微笑みの終了と同時に消える。最高の賛辞を捧げているかに見えるこの微笑の主に、ニックが完全に心を許しているわけではないということが、続く文章によって暴かれる。

今僕の目の前にいるのは、エレガントだがどこかに粗暴さのうかがえる一人の若い男 (an elegant young rough-neck) である。三十をひとつか二つ超えたくらい。その念の入った丁寧な物言いは、危ういところで滑稽の域に達することをまぬがれている。彼が名前を名乗る少し前から、この男はとても注意深く言葉を選んでしゃべっているなという強い印象があつた。

(二五)

ギャツビーという秀でた個人の努力も、「生まれながらに公平に振り当てられるわけではない」「人間の基本的な良識や品位」の壁を超えることはできない。彼がどんなに努力を重ね、磨きをかけても、育ちの良いニックから見れば「エレガントな乱暴者 (an elegant young rough-neck)」でしかない。

二年後にこれを書いているニックは、ギャツビーが自分の微笑みの効果を自覚していることを抜け目なく指摘する。十七歳のギャツビーが鉱山王のダン・コーデイと初めて出会ったときのことを想像し、「きつと彼はコーデイに向かつてにつこりと微笑みかけたのだろう。その微笑みが強い効果を發揮することを、彼はその頃には既に承知していたはずだ」、と二年後のニックは記す。しかし、ギャツビーと出会ったばかりのニックはとにかく彼の微笑みに魅了されていた。

素晴らしい隣人を得た喜びを隠せないニックは、饒舌になり、連れのジョーダンとわたしたち読者に対して過大なサーヴィスをする。トム邸宅から帰宅した夜、ニックは対岸に向かつて両腕を伸ばすギャツビーの姿をすで見ているにも拘らず、この日のパーティでは意外なことを書く、「驚きの念を彼女 (ジョーダン) に伝えないわけにはいかなかった。ギャツビー氏というのはてつきり、血色の良いでつぷりとした中年男に違いないと思ひ込んでいたのだ」。

たしかにニックがギャツビーと言葉を交わしたのは初めてであるが、暗い中で遠目に見ても、「でつぷりとした中年男」か「だいたい同年配の男」かは区別できたはずだ。彼を初めて見たその夜も「落ちつきのある動作や、芝生に両脚で揺らぎなく立つ様子」をニックは確認していた。ニックがジョーダンやわたしたちに伝えたかったのは、ギャツビーの外見が想像と違っていたことなどではない。彼が伝えたかったのは、小説の主人公のように「ロマンチックな憶測を盛大にかき立てている」人物が、自分にとって魅力的であることを発見した喜びである。「血色の良いでつぷりとした中年男」が主人公では「ロマンチックな憶測」が色褪せてしまう。そして何より重要なのは、この魅力的な人物

が彼を大切にしてくれたことによる満足である。

もう一度繰返すが、ニツクの究極的な関心は自分自身にしかない。だからこそ、同じパーティで、彼がギャツビーをすぐに認識できなかったことを詫びたときの「そんな氣遣いは無用です」という返答が「ほとんど命令するみたい」であり、それに続く「たいしたことじゃありませんよ、オールド・スポーツ」という「口癖のような呼びかけには、ひととおりの親密さしかこもっていない」ことに気づくと、ニツクの感激も冷える。それでも「おやすみなさい」という最後の挨拶で、ギャツビーが微笑むと、「それだけで突然、自分が最後の客のなかにいてよかつたな、遅くまで残っていた意味はあつたな、という氣持ちになつた。それこそ彼が一貫して渴望していたことなのだ、とさえ思へた」と素直に喜ぶという具合だ。しかし、人を逸らさないということが果してギャツビーの「一貫して渴望していたこと」であるかは定かではない。ニツクこそが、ギャツビーにそうあつて欲しいと「一貫して渴望していた」のだ。

こうしてギャツビーはニツクの「ロマンチックな憶測」に應えることと素晴らしい微笑みでニツクをうつとりさせるといふ多大な義務を負わされることになる。語り手が主人公に対して自分自身には不可能な冒險を期待することは珍しくはない。とはいえ、生意気で要求の多いニツクは、グラン・モーヌの愛の彷徨を語る控え目で辛抱強いフランソワ・スレルとは違い、自身の語る人物に全幅の信頼と憧れを預けることがない。ニツクという語り手は、父親の教えのお蔭か、「何ごとによらずものごとをすぐに決めつけない」という傾向を身につけてしまった⁽¹¹¹⁾と公言しながら、あらゆる人物を容赦なく上から見下し、批判しながら語る意地の悪い人物に語り手である。

ニツクがギャツビーの車でランチを食べにニューヨークに行く途中、「話題というものをろくすっぽ持たないギャツビーのいかにも嘘らしい半生の物語や、すれ違った車の中でふんぞり返っている黒人たちを嘲笑したことに ついては前章で触れたとおりだ。とはいえ、ニューヨーク行きの車の中で交わされたのはニツクの軽蔑の対象になるような

ものばかりではなかった。

ギャツビーは、ニックが「あほらしくて、思わず吹き出しなくなるのを、必死に抑えなくては」^(二五)ならないような作り話を大真面目にさんざん聞かせた後、今度はニックの心を感動で揺さぶる。荒唐無稽な捏造の過去が戦争の勃発によって消え去ると、同じ戦争の経験を共有しているニックは真摯に耳を傾ける。ギャツビーは第一次大戦の功労者としてその武功を称える勲章を同盟国から授けられている。彼に勲章を授与した国のなかには「あのちっぽけなモンテネグロまでが」^(二六)含まれていて、この国の名前を口にするギャツビーの顔にはニックの大好きな微笑が浮かぶ。かつて自邸のパーティでニックと初めて話をしたときにギャツビーが見せたあの素敵な微笑だ。

「ちっぽけなモンテネグロ」という国名を口にしたギャツビーの微笑みに、ニックは再び、過剰なまでの意味を見出す。

その微笑みには、モンテネグロという国の苦難に満ちた歴史に対する理解と、モンテネグロ国民の勇猛な闘いぶりに対する思いやりが見て取れた。モンテネグロの温かくささやかな心から、なぜ彼に対するこのような賞讃が導き出されたか、その国家の置かれた複雑な立場を、その微笑みは隅まで心得ていた。僕の先ほどまでの疑念は魅了される思いにとって代わられた。まるでひと山の雑誌を一気に流し読みしたときのような気分だった。^(二七)

この時、素敵に微笑んだギャツビーがモンテネグロという国の歴史やその国民に対する共感を語ったのか否かこの文章からはまったく分からない。「話題というものをろくすっぽ持たない」、オックスフォード卒も怪しいギャツビーが「その国家の置かれた複雑な立場」をどこまで心得ていたのか不明である。彼の微笑みがそのようにニックに信じ込ませただけであつても不思議はない。二年後のニックが気づくように、ギャツビーは自分の微笑みの威力を知っているに違いないし、ニックは自分の気持ちのみならず、自身の知識も語りの対象に注ぎ込む語り手である。ギャツビー

は見せたいように自分を見せ、ニックは語りたいように語ったのだとも言える。

さてここで、ギャツビーはモンテネグロから授与された「ダニール勲章」を取り出して見せる。この勲章に対して、「先ほどの疑念は魅了される思いにとつて代わられた」はずのニックは、「意外にも、それは真正正銘の本物みたいに見えた」、と持ち前の猜疑心をちらつかせる。魅了も賞讃も微笑みが続いているあいだしが続かないようだ。

こうしたニックの心の動きに構うことなく、ギャツビーは自分の見せたいものを見せ続ける。「もうひとつ、私が肌身離さず持ち歩いているもの」として「オックスフォード時代の思い出の品で、トリニティー・カレッジの中庭で撮った」写真(二二九)をニックに差し出す。果して、クリケットのバットを手にしたギャツビーが写っている。「すべては真実であつたのだ」とニックもいったんは納得する。ところが、まもなくスピード違反を取り締まるオートバイがギャツビーの車のわきに追いついたときに、ニックの意地の悪さが露呈する。ギャツビーが「札入れから白いカードを出して、警官の目の前にひらひらさせ」ると、警官は頭を下げて去っていく。そこで、ニックの驚くべき言葉がギャツビーに向けられる。

「ねえ、いったい何を見せたんだ？」と僕は問いただした。「オックスフォードの写真かい？」

「以前、警察長官のために便宜をはかる機会があつてね、それ以来、毎年クリスマス・カードを送ってくれるんだ」(二三〇)

ニックの言葉は辛辣であり、いかにも幼稚であるが、ギャツビーはニックの揶揄にはまったく取り合わない。オックスフォードの写真を見て一時はギャツビーの言葉を信頼したはずのニックが、なぜここで無関係な写真の話を蒸し返すのか。それは、これから一緒にするランチの後にニックが予定しているジョーダン・ペイカーとお茶のときに、ギャツビーが自身の過去をジョーダンからニックに伝えてもらうように彼女に頼んでおいたことを知らされたからとも予想される。先回りされたこと、利用されたことにニックは自尊心を傷つけられたのであろう。「僕はなにもジェ

イ・ギャツビー氏について論じるために、ジョーダンをお茶に誘ったわけではないのだ⁽¹¹¹⁾、と彼は憤慨する。じつさい、この後、食事をしながらギャツビーが「例の微笑み」を浮かべて謝ることになるが、ニックは「今回はそれにまどわされまいと」し、「謎かけは好きじゃない」とはっきり答えることになる⁽¹¹²⁾。この小さな不機嫌さが、このあとすぐになすれ違う車のなかでふんぞり返っているあの三人の黒人に対する意地の悪い笑いの引き金になっているのかもしれない。

ニックの不機嫌は続く。この日のランチで紹介されたウルフシャイムが、態度も趣味も経歴もニックの誇る「基本的な良識や品位」から外れた人間であったこと、ランチの後のジョーダンとのお茶のみならず、ウルフシャイムを混じえての三人のランチそのものにもギャツビーの何らかの下心が感じられることから、このランチを企画したのがギャツビーであったにも拘らず、ニックは「勘定を払うと言って譲らなかった⁽¹¹³⁾」。じつさい、ギャツビーは自身の後ろ暗い仕事に引き込まれていたのだが、半ば騙されて連れてこられたというシナリオが誇り高いニックには耐えられなかったのである。

後になって分かることであるが、すべての言動が綿密な計算の結果であるギャツビーと比べ、ニックの言動はいかにも単純で、衝動的である。パーティーの客たちの自分に関する噂を知っていたギャツビーは、自分に対する軽蔑と尊敬のあいだで揺れ動くニックの心の動きを知ってか知らずが、どこまでも自分の伝えたいことを伝え、自分が行うべきことを行い、ニックに行わせるべきことを行わせる。ニックがデイジーの再従兄弟で、ジョーダンと知り合いであることは、ギャツビーにとって最大の価値であった。ニックが唯一、自らの意思でギャツビーのために行ったのは彼の葬式だけだ。

これは、子供時代に「ホッパロング・キャンディー」の本に一九〇九年九月十二日という日付で、午前六時の起床

から午後九時までのスケジュールをぎつしりと書き込み、生活上の細々とした努力を「決意」として書き付け、早くも十七歳でジェームス・ギャッツという親からもらった名前を捨てた人間と、いつまでも父親の教えと家柄に拘泥し、親類一同の合意と、最初の一年間の父親からの資金援助を得て東部に出てきた人間の違いである。ベンジャミン・フランクリン流の努力と独学に学び、鉱山王コーデイのヨットに「世界の美と栄光のすべての具現」を見出し、戦争で武勲を挙げ、「一九一九年のワールド・シリーズで、八百長を仕組んだ」ギャングのウルフシャイムに「育て」られたギャツビーに、イエール大学出の秀才で、戦争のトラウマから立ち直るために東部に出て来て、「だいたいいつもイエール・クラブで夕食を」とるような駆け出しの証券マンの「良識や品位」が太刀打ちできるわけがない。ギャツビーは計算づくでニックに近づき、ニックを動かし、デイジーとの再会を果たすのだ。

どこまでも未熟なニックは、男性としても認められていないように思われる場合もある。すでに述べたとおり、トムによってマートルのアパートメントにほとんど無理やり連れて行かれたニックが、着いて間もなく煙草を買いに出て、戻ってくると、トムとマートルは「部屋から姿を消していた」^(一四)。ニューヨークに来る途中、マートルの夫の自動車修理工場に寄ったときに、「身体の中心部分が絶え間なくずぶつているような」「内に秘めている活力」が「一目で感じ取れる」^(一四)マートルに「思いつめたように」^(一四)会いたがったトムが、アパートメントの中で彼女と姿を消しているということは、寝室にこもって抱き合うため以外にない。家に友人を連れて来た人の行為としてはきわめて傍若無人な振る舞いであり、少なくとも一人前の大人に対しては非常識で失礼な行為である。すでに前章で見たように、動物の集団のボスのようなトムもそのパートナーや女性たちも、トム以外の同性を男性として認めていない。ニックはこのような扱いを受けた屈辱のためか、あるいは性的な羞恥心からか、二人の性的行為には一切触れず、「僕

が戻ってきたとき、二人は姿を消していた (When I came back they had disappeared)』と語るのみである。^(一四四)

野間正二も指摘しているように、このアパートメントは「小さな居間、小さな食堂、小さな寝室がひとつ」、^(一四五)という狭い空間である。「小さな寝室」とドア一枚隔てた「小さな居間」からは寝室の様子が手に取るようにわかるはずだ。

「二人が姿を消していたので」 (they had disappeared so)」、^(一四六)ニックは「奥ゆかしく (discreetly) 居間に腰を下ろし、

『ペテロと呼ばれたシモン』の「章をひとつ読む」。しかし「本そのものに問題があったのか、それともウイスキーで僕の頭が乱れていたか、そのどちらかに違いはない。そこにある文章はまったく意味をなさなかったから」、^(一四七)と彼は書く。

野間はこの部分を引用しながら、読書の妨げとして語り手が挙げている理由を二つとも退け、「本の内要が理解できなかったのは、となりの寝室でふたりがセックスしているのが気になったからだ」と述べている。^(一四八)もちろん、野間の

言うように、二九歳の若いニックが、防音装置もない小さなアパートメントの隣室で、精力漲る男女が愛し合うのを

「奥ゆかしく」聞きながら本を読むのは相当な忍耐力を要することであろう。テキストのなかで語り手個人にとつてもつとも屈辱的な出来事が語られないことを、野間は「ニックの語らない空白」と名づけているが、わたしたちにとつて

より興味深いのは、語られない出来事がもう一つの語られない出来事を引き起こすことである。人間としても男性としても非常な不快感を強いられたニックは、思いがけない行動に出る。

トムとマートルが愛し合ってからしばらく後、二人の口論が流血の騒ぎに至るのを機会に、写真師のマッキーがこのアパートメントを抜け出すが、彼を追いかけるようにして、ニックも脱出に成功する。マッキーはこのパーティで

ニックの関心を引いた唯一の人物だ。マッキーは最初に会った時から、「青白い女性的な男 (a pale feminine man)」と表現され、「頬骨の上に石鹸の白い泡がぼつんとついていた」。^(一五〇)「午後のあいだずっと、それが気になってしかたがな

かった」ニックは「ハンカチを取り出し」、「椅子に座ったまま眠り込んで」しまったマッキーの頬から石鹸の跡を拭

き取つてやる。このパーティにさんざん嫌気がさしていたとはいえ、なぜ、ニックはマッキーの「後を追つた (followed)」のか。^(二五二)

こうしたニックの氣遣いが眠っていたマッキーにも通じていたのか、エレベーターの中で彼は「いつかランチに来ませんか」とニックを誘う。この時マッキーが非常に緊張していることは、「そのレバーから手を話してくれませんかね」というエレベーター・ボーイのマッキーに対するきつい声から明らかだ。^(二五三)問題はマッキーの誘いに対するニックの快諾の後だ。語られない空白の時間の後、いつのまにか、ニックは「彼 (マッキー) のベッドの横に立つて」いる。「彼は下着姿で、シーツのあいだに足を入れたまま起き上がり、両手に彼の作品を入れた大きな紙ばさみを抱えている」。^(二五四)これはニックがマッキーとベッドを共にした後の描写に違いない。「〈芸術方面の仕事〉をしている」という触れ込みであるが、とくに彼の写真師としての手腕を評価しているわけでもなく、「石鹼の泡」が気にかかるだけの相手をなぜ追ひ掛け、ベッドを共にしたのか。

故郷に婚約者と噂されるような女性を残し、東部ではジョーダンと付き合うことになるニックに、同性愛の言及は他にはない。しかし、狭いアパートメントのなかでトムとマートルの愛し合うさまを聞かされたニックは、その夜、間違ひなく、「女性的な (feminine)」マッキーと寝たのだ。マッキーと別れたニックはペンシルヴァニア駅の下のホームの冷たいベンチに横になり、「半ば眠りながら『トリビュン』の朝刊に目を据えて、四時の列車を待つ」ことになるが、^(二五五)マートルのアパートメントを出たのが夜の一〇時過ぎであるから、少なくとも四時間以上はマッキーと一緒に過ごしたことになる。しかし、この四時間以上の時間についての具対的な行動を語る言葉はない。ニックとマッキーの行為はあたかもなかったことのように処理されている。とはいえ、性行為が明示的に語れないのはマッキーとの場合だけではない。

ニックはジョーダンとの性行為も明示しない。彼はジョーダンからギャツビーとデイジーの馴れ初めからデイジーの結婚とギャツビーの変わらぬ想いについての物語を聞いた後、二人で観光用の馬車に乗り、「ジョーダンの金色の肩に腕を回して彼女を抱き寄せ、夕食に誘ったが、気がつくと、デイジーのことも、ギャツビーのことも考えることなく、あらゆることに懷疑的な」^(二五六)ジョーダンにだけ想いを集中させていた。そうして、ジョーダンからデイジーとギャツビーをニックの家で再会させる計画を聞かされ、「彼女を、今度は自分の顔の方にぐつと抱き寄せた」^(二五七)。その後の時間はニックの帰宅まで語られることはない。

タクシーを降りたニックを、待ちかねていたようにギャツビーが迎え、ドライブに誘うがニックは断る。するとギャツビーはプールに誘うがやはり彼は断る。「その宵にあった出来事のおかげで、足が宙に浮いているような、ほんのりとした気分になっていた」^(二五九)(The evening had made me *lightheaded and happy*.)^(二六〇)ニックはギャツビーと別れ、「自宅のドアに入ると同時に、深い眠りに落ちたようだった」^(二六一)。野間も指摘しているとおり、ニックのこの心地よい疲れは充足した性行為の疲れ以外にはあり得ない。マッキーと寝た後の「冷え冷えとした」^(二六二)寒さとは大きく異なっている。いづれにおいても、性行為の前後のみが語られているが、ジョーダンとの場合はギャツビーのロマンスを聞いた後の余韻が残り、マッキーとの場合はドア一枚隔った場所でトムとマートルの性行為の音を聞かされ、男性として認識されない屈辱の後の悲哀が滲んでいる。さらにまた、ジョーダンとの性行為は東部を離れるまで何度か繰り返され、親交を深めたものと思われるが、^(二六三)マッキーとは一度切りの関係だった。性関係にいささかの不安定さがあるとしても、ニックが同性と性行為に及ぶためには、決して語りたくないような性的屈辱を受ける必要があった。言葉にすることさえ辛い屈辱感が、やはり語りたくない性行為に彼を走らせたのだ。彼は同性と関係を持ったことをその原因と共にどこまでも恥じている。性に対する恥じらいというレベルを超えて、社会的、人間的レベルで自らの同性愛体験を語

ることを潔しとしないのだ。

ニックがジョーダンとの性行為を明示的に語らないことが、野間の指摘するような「とうじのアメリカ」の慎ましさと彼自身の「人間の基本的な良識や品位」のためであることは言うまでもない。ギャツビーも再会後のデイジーとの関係について「デイジーが頻繁にここに来るんだ——昼間にだけだ」と、^(六三)という言い方をする。前章でトムがデイジーの小指のつけねに青あざをつけてしまった話を引用したが、この青あざも寝室でつけられたものに違いない。ギャツビーもデイジーも「とうじのアメリカ」の慎ましさにしたがって、自らの性行為を告白している。

故郷に発つ前日の夜、ギャツビーの屋敷を訪れたニックが、白い階段に「卑猥な落書き」を見つけ、落書きの内要を明示せずに「靴底で石の上をこすり、落書きを消した」ことを野間はニックの性に対する羞恥心の証左としている。ここでニックの性的羞恥心に異議申し立てをするつもりはない。野間の指摘するとおり、ニックが消したのは「fuck」の四文字に違いない。^(六五)ニックはこれを見ることさえ忌避している。とはいえ、ジョーダンとの性行為は明示的には語られていないものの、「落書きを消す」ように隠蔽されているとは言い難い。ジョーダンとの性行為はまた、マッキーとの性行為が事後的に言及されることが一切ないことと同じではない。明示されないことと隠蔽されることの違いがここにある。マッキーとの性行為はパーティでの屈辱に対する虚しい抵抗であり、「冷え冷えとした」^(六六)駅の描写に続くだけの淋しいものだ。間違っても「ほんのりとした気分」をもたらずものではなかった。いっぽう、ジョーダンとの性行為は「その宵にあった出来事」という表現でことさらに強調されているとさえ言えるだろう。ジョーダンから聞かされたギャツビーのロマンスを祝福し、それに呼応するように、ニック自身もロマンスの語り手の若い女性と幸福なひと時を過ごしたことは、慎ましい生活を送るニックにとつて誇らしい喜びであつたはずだ。しかもニックにとつて、この日はギャツビーに騙されるようにして胡散臭いユダヤ人のギャング、ウルフシャイムと三人でランチを

食べ、その後のジョーダンとお茶の時間までギャツビーに利用される面白くない一日で終わっていたはずだ。だからこそ、騙されるように連れてこられたランチであったにも拘らず、ニックがこれを企画したギャツビーに奢られることを潔しとせず、「勘定を払うと言って譲らなかつた」^(二六七)のはすでに述べたとおりだ。ところが、ギャツビーの壮大なロマンスを聞かされ、これを語ってくれたジョーダンと夕暮れのニューヨークを馬車に乗り、ロマンティックな雰囲気^(二六八)の盛り上がったところで愛の時間を過ごす結果となつたのであるから、望外の喜びが彼をくらくらさせた(The evening had made me lighter-headed)としても不思議はない。この喜びのお蔭で、ニックはこの日一日の不機嫌さを忘れ、男性としての自信をようやく取り戻すことができ、安心して「深い眠り」に落ちることができたのだ。

ところで、自尊心の強いニックは、ジョーダンのように「ゴルフのチャンピオン」で、「誰もが知っている有名人」とは「一緒にいるんなところに行くのが嬉しかった」^(二六八)が、そうした「有名人」でもなく、「特殊な社会」の近くにゐるわけでもない相手との性行為に関してはかなり素つ氣ない。野間も指摘しているが、「ジャージー・シティーに住む経理部の娘(a girl)とつかの間の関係(a short affair)をもつたことさえあつた」^(二七〇)と書くだけで。彼女の兄が「含みのある視線をこちらに向けるようになったので、七月に彼女が休暇をとつたときに、さりげなく穩便に關係を解消した」^(二七一)、という淡白さだ。

ニックは、「下の階層」の異性に対して、マートルの取り巻きたち同様の冷酷さを見せるが、それでも自分が女性を嫌いでないことを強調する。彼が「ニューヨークが好きになり始めた」理由の一つとして「僕らの好奇の目に与えてくれる満足感」を挙げる。「満足感」とは、「五番街を歩きながら、人混みの中から夢をかき立てる女性を選び出し、さあ、これから僕は彼女の生活に入り込んでいこうとしているんだと、しばし想像する」ような自由、「あくまで想

像のうちでだが、僕は人目につかない通りの角にある彼女たちの住居まであとをつけて」いくような自由、そうした女性たちが「戸口を抜けてほんのりとした暗闇の中に消えていく前に、こちらを振り向き、意味ありげな微笑みを僕に送る」のを想像するような自由が与えてくれる満足感である。じつさいにそうした女性たちと付き合うか否かは問題でない。そうした可能性を期待させてくれる都市の開放性に順応できる、異性愛者としての自分に満足しているのだ。

デイジーの友人でもあるジョーダンとの関係については、「彼女（ジョーダン）は意図的に我々の関係を一歩前進させたので、（……）故郷に残してきたしがらみをまづきれいにしておかなくてはならない」、と彼女を未来につながるものと位置づける。「故郷に残してきたしがらみ」とは、トムの家のパーティの帰り、トムとデイジーから婚約したのではないかと問われた相手である。彼女との婚約をきっぱりと否定したニックであるが、「週に一度はその娘に手紙を書いていたし、末尾には「ラブ、ニック」と記して」^(二七三)いる。だが、「彼女について覚えているのは、テニスをしているとき、上唇にうっすらと口髭みたいな汗が浮かんだ、ということくらい」^(二七四)のニックは、彼女との結婚を頑固に拒否する。彼女との結婚の評判が立ち、そのことが「東部に越してきた理由のひとつである。噂があるからといって、幼なじみとの交際を免つわけにはいかないし、かといって流れにひきずられるままに身を固めるつもりもなかった」^(二七五)というのが彼の言い分だ。世間で「数少ない正直な人間」であるニックは、ジョーダンとの関係を進め、未来に向かって歩き出すために、幼なじみとの「問わず語らずの約束のようなもの」を「いったん解消して」から「自由の身で行動」^(二七六)したい、というのである。

このようにニックはジョーダンとの関係を進めることと、幼なじみの女性から遠ざかることを同時進行のなかで捉えているが、「ものを考えるのにいちいち時間がかかる性格だし、欲望に歯止めをかけてくれるいくつかの規則を後

生大事に抱え込んでゐる」ニックの決意は、デイジーに向かうギャツビーのようにきつぱりしたものではない。彼がどのように幼なじみとの「約束のようなもの」を「いったん解消し」たのか、そもそも実際に解消したのか定かではない。また、ジョーダンとの関係も「少しのあいだ僕は、自分が彼女を愛していると思ひ込んだ」という限定つきの曖昧なものである。それでもその「少しのあいだ」、彼は彼女の欠点を列挙しながらも、彼女と別れようとはしない。彼女が他人から「借りた車を、屋根を開けたまま雨の中に放置し」、「そのことでしらっと嘘をついた」のを見たり、「彼女の出場した最初の大きなゴルフ・トーナメント」の「準決勝のラウンドで、彼女が悪いライのボールを動かし」という指摘があった」のを思い出したり、彼女の粗雑な運転が、道路で作業していた「一人の男の上着のボタンをフエンダーでひっかけてしまった」のに平気でいたりするのを見たあとでも、彼女が「救いがたく不正直な女」であることを知ったうえで、ニックは「女性の不正直さというものを、それほど真剣に咎めることができない」と述べる。「不正直さ」が気にならないということが「自分が彼女を愛していると思ひ込んで」いたということと同一であったのだ。

ジョーダンに対するニックの愛は、少なくとも、ギャツビーがトムの対決で敗北し、デイジーと一緒に黄色い車で立ち去ったあと、トムの運転する青いクーペにとジョーダンと一緒に乗ってロング・アイランドに向かう時までは続いていた。ニックはふたたび、自分が三十歳を迎えたこと、これから「孤独な十年間」がやって来ることに想いを馳せた後、「でも僕の隣にはジョーダンがいる。この女はデイジーと違い、ずっと昔に忘れられた夢 (well forgotten dreams from age to age) を、時代が代わってもひびきずりまわすような愚かしい真似はするまい」と考えているが、そのとき、ジョーダンが「いかにもくたびれた様子で僕の上着の肩に顔をこすり寄せ」てくる。「そして誘いかけるように手を押しつけてきたとき、三十歳になったことの暗い衝撃は、ぼくの心から遠のき霞んでいった」と結ぶ。

ここにおいて、ニックは明らかに、これからの十年間をジョーダンと一緒に過ごすつもりであり、轢き逃げ事件さえなかったなら、この日もこれから二人で愛のひとつを過ごしたかもしれない。ギャツビーの敗北に落胆したニックにとって、このときはジョーダンとの将来が手堅いものと思われたのであろう。

後で述べることになるが、ニックはギャツビーのデイジーに対する厳しい愛の要求に怯みながらも、プラザ・ホテルの対決の半ばまでは、明らかにギャツビーに声援を送っていた。自宅から車に乗る前に、トムがドラッグ・ストアのことで当て擦りを言う^(二八三)と、ドラッグ・ストアで違法な金儲けをしてきたギャツビーは「まったく見慣れない、しかし同時にどことなく心当たりのある一言葉で表現されるのをどこかで耳にしたことはあるという類いの表情」^(二八三)を浮かべるが、デイジーの眉をひそめさせたのは、ギャツビーではなくトムであった。ホテルの部屋に入ってから、トムの詰問に答えて、ギャツビーが「五ヶ月間」のオックスフォード在籍について説明したときには、ニックは、「立ち上がって、『この男の背中をばんと叩いてやりたい』^(二八四)と思うほどの喜びようだ。ところがそのうち、形勢は回収不可能なまでに逆転する。妥協を知らないギャツビーの愛の苛酷さ、トムに追い詰められたときの「人を殺したことがある」男のような顔つき、^(二八五)「まともな言葉では描写できそうにない形相」を見たニックは、打ひしがれたギャツビーのことよりも、自身が三十歳になったことの「暗い衝撃」に心を奪われてしまう。ギャツビーの砕け散った夢を前にして、ロマンチックな夢を担ってくれるものを失ったニックは、もはや学生時代の気分に戻帰することも能わず、孤独への恐怖に追いついてられ、すぐに手の届くところにいるジョーダンに縋りついたのである。ここでいったんは、「ずっと昔に忘れられた夢」を追うことの虚しさに気づいたつもりになったニックは、思わず、身近な愛と妥協することに幸せを求めようとしたのだ。しかし、ギャツビーはニックにとってロマンチックな恋のヒーローというだけでは終わらない。身近に手の届く愛以上のものをニックに示して、彼の前から姿を消すことになる。

3 ずっと昔に忘れられた夢の力

ジョーダンやギャツビーと知り合う以前の働き始めたばかりのニックは、すでに見たように、戦争体験以前の学生時代に戻りたい青年であった。そのため、自身とは体格も性格も異なるトムについてさえ、「心の底で求めているものは、いつかの勝目のないフットボールの試合で味わった、あのドラマティックな興奮 (the dramatic turbulence) のようなものではなかったろうか」とおそらくは場違いの懷古的でロマンチックな感情移入をしていた。ロマンチックな興奮こそが戦争体験で受けたトラウマによって置かれた「宇宙のギザギザな果ての断崖」から彼を救い出し、生きる力を与えてくれるべきものだからである。ポロ用の馬を連れて引越しを繰り返している卒業後のトムが、大学時代のフットボールの試合を追憶しているまいかが問題ではない。ニックは自分が生きていくために過去の興奮をトムに追いかけさせるのだ。本論の冒頭で述べたように、「物語ることは、究極において「わたし」を語ることだから」である。しかし、共感よりも反感を掻き立てることの多いトムへの感情移入には自ずと限界がある。

ニックのロマンチックな感情移入を満足させるためには、フットボールの試合よりも波瀾万丈のドラマティックな過去を持つ人物が必要であった。成金ギャングで初々しい恋 (ニックにはそう見えた) のできるギャツビーと出会ったことは、東部にやってきて間もないニックにとって僥倖であった。すでに述べたとおり、ニックはギャツビーの過去を知る以前から謎めいた人物として惹かれていた。ギャツビーのパーティでまだ彼と直接言葉も交わさないうちから、彼のいかがわしい噂話を聞いて、「ひそひそ声で噂をするということ自体、ギャツビーがロマンチックな憶測を盛大にかき立てていることの証左」だ、と期待していた。そうして、ギャツビーの微笑みの虜になったことは前章で述べたとおりだ。

ニツクの期待はジョーダンからギャツビーのロマンスを聞かされることで一気に開花する。ギャツビーこそがニツクの豊饒な言葉を引き出し、自身の人生には不可能なロマンチックな夢を実現させるのに理想的な人物であった。対岸に見える、五年前の恋人の住む邸宅の緑色のランプに向かって両手を差し伸べて身を震わせる姿、^(八九〇) デイジーとの五年ぶりの再会のためにニツクの庭の芝を刈らせ、温室まるごとひとつぶぐらいの花を用意し、白いフランネルのスーツに銀色のシャツ、金色のネクタイを身に付け、緊張のあまり蒼白の顔、限のできた目で現れる姿、豪華な屋敷の簡素なベッドルームに置かれた唯一豪華なドレッサーに置かれた「つや消しの金色の」ブラシで髪をとかすデイジーを見て、「まぶしそうに手を目の上にかざし、笑い出す」姿、^(八九一) デイジーからトムに「あなたを愛したことはただの一度もありません」と言わせるために張り切つて着ているピンクのスーツ姿、^(八九二) いずれもが、戦争の英雄で三十過ぎの大富豪としてはあまりに世間ずれを欠いた恋愛至上主義のヒーローとしてニツクの胸を打ったはずだ。故郷の幼なじみに情性的に「ラブ、ニツク」と記した手紙を毎週書いたり、「経理部の娘とつかの間の関係を持つたり」していたニツクにとつて、ギャツビーのひたむきな姿は素晴らしく純粹で、情熱的な愛の表現として映つたはずである。自身の過去にはもちろん、周囲の人々の間にも、このような一途な愛を見ることがなかったニツクは、ロマンチックだったとは言えない自身の学生時代への回帰よりも、五年前の恋を成就させようというギャツビーの夢に心を奪われたのだった。トムの目を盗んで、ギャツビーとデイジーの再会を実現させ、ギャツビーの恋を成就させることで彼の夢を一緒に生きたいとすら願つたはずだ。

ギャツビーに出会う以前から、トムの不実とデイジーの不幸な家庭生活を知り、ブキヤナン邸からの帰りの車のなかでハンドルを握りながら、「デイジーのとるべき道は、どう考えても、子供を抱きかかえてすぐにでもあの家を飛び出すことだ。しかし彼女の頭にはそういう考えはまったくないらしい」、^(八九三) と考えたニツクである。そこにかつて相

思相愛だった理想の恋人ギャツビーが現れたのであるから、デイジーはトムを犠牲にしてギャツビーとの恋を成就するのが当然の成り行きのはずだった。ニックにギャツビーとデイジーの五年前のロマンスについて語ったジョーダンも「デイジーだって、何か心のはりを持って生きるべきだわ (And Daisy ought to have something in her life.)」^(一九七)と二人の恋を肯定する。そしてまた、ギャツビーの五年前のロマンスに煽られるようにして、これを語ったジョーダンはニックが恋のひとつきを過ぎたのはすでに述べたとおりである。ギャツビーの恋が、トムとマートル、あるいはニックとジョーダンの恋のようなものであったなら、ギャツビーはデイジーを獲得していたに違いない。しかし、ギャツビーは頭でっかちのニックや「救い難く不正直な」ジョーダンなどには想像を及ばないような形で、恋の成就を追い求めていたのだ。そもそも、「子供を抱きかかえてすぐにでもあの家を飛び出す」べきなのに、「そういう考えはまったくないらしい」デイジーが、ギャツビーの胸に飛び込むために「特殊な社会」を飛び出すことができるだろうか。ギャツビーにとって恋を成就することは「何か心のはりを持って生きる」といった気軽な目標ではなかった。本論の最初の方で述べたように、『グレート・ギャツビー』の物語の主人公は紛れもなくギャツビーである。ギャツビーにとって最重要課題はデイジーを取り戻すことだ。それもトムの妻としての現在のデイジーではなく、五年前のデイジーでなくてはいいけない。

彼が求めているのはただひとつ、デイジーがトムに向かって「あなたを愛したことはただの一度もありません (I never loved you.)」と告げることだった。彼女がそのひとことで四年にわたる結婚生活を白紙に戻したあと、二人はより実際的な行動に踏み切ることができる。そのひとつは、自由の身になったデイジーと二人でルイヴィルに帰り、五年前のように彼女の家から結婚式をあげることだった。(they were to go back to Louisville and be married from her house — just as it were five years ago.)^(一九七)

この希望を語ったあと、ギャツビーは絶望的に言う、「でも彼女はわかつてくれないんだ。前にはちゃんとわかつていたのに。私たちは何時間もいっしょに座って……」^(一九八)。これに対して、ニックは自身も五年以上昔の学生時代への回帰を願っていたにも拘らず、「僕なら彼女に要求しすぎるようなことはしないよ。過去は繰り返せないんだから」^(一九九)、といかにも常識的なアドヴァイスをする。しかし、ギャツビーは信じられないという様子で叫ぶ、「過去が繰り返せないだって？ できないわけがない」^(二〇〇)。そう言つてギャツビーは「まるで彼の屋敷の陰の、手の届かないどこかに過去が潜んでいるのではないかというように、やみくもに周囲を見回すのだった」^(二〇一)。そうして、「何もかも昔あったとおりにしてみせます。彼女だつてわかつてくれるでしょう」と決意を込めて言う^(二〇二)。しかし、観察者ニックは、ギャツビーがデイジーと初めて再会したその日から、二人の愛の決定的な違いに気づいていないわけではなかった。

デイジーが彼の夢に追いつけないという事態は、その午後になつて幾度も生じたに違いない。しかしそのことでデイジーを責めるのは酷というものだ。結局のところ、彼の幻想の持つ活力^(二〇三)があまりに並み外れたものだつたのだ。それはデイジーを既に凌駕していたし、あらゆるものを凌駕してしまつていた。彼は創造的熱情をもつて、その幻想に全身全霊を投じていた。(……) いかにも燃えさかる火も、いかなる瑞々しさも、一人の男がその冥府のごとき胸に積みあげるものにはかなわない。^(二〇四)

ニックが「夢」あるいは「幻想」と呼ぶのは、それが愛情と呼ぶにはあまりに孤独な感情だからである。五年前、ギャツビーとデイジーが愛し合った時間はそれほど長くなかつた。「一九一七年の十月のある日」^(二〇五)、ジョーダンは、「若い娘なら誰しも、いつの日かそんな目で男の人に見つめてもらいたいものだ」と望むような、素敵な視線^(二〇六)でデイジーをじつと見つめているギャツビーに出会う。ギャツビーが「外地に送られる前日の午後」、デイジーと抱き合い、「気持ち確かめあつてから一ヶ月ばかり、これほど親密に相手を肌身に感じたことはなかつたし、これほど密接に心を通じ合わせたこともなかつた」^(二〇七)という。したがつて、およそ一月余りの蜜月のあと五年近くの別離が二人の間にあつ

たということになる。「五年間ずっと会っていたのか?」というトムの問いに、「会うことはできなかった。でも我々二人はそのあいだも変わることなく愛し合ってきたんだよ」とギャツビーは答えるが、トムを納得させることはできない。

一九一七年の初冬にギャツビーは「外地に送られ」、翌一九一八年十一月の休戦協定のあとはオックスフォードに送られ、帰国が延びてしまった。待ちきれなかった二〇歳のデイジーは、とうとう一九二〇年六月、大金持ちのトム・ブキナンと結婚してしまう。ギャツビーのことを忘れられないデイジーは、結婚前夜、「ぐでんぐでんに酔っぱらって」、トムから贈られた「三十五万ドルの値がついた真珠の首飾り」をくず箱に投げ入れ、「それつのまわらない声で」婚約破棄を叫び、「泣いて泣いて、泣きまくった」。それでも彼女はジョーダンの手を煩わせて、「明くる日の五時に、顔色ひとつかえずにトムと結婚式をあげ、南太平洋への三ヶ月にわたる新婚旅行へ出発した」。以後、トムの浮気に悩まされることがあっても、彼女は「浮気をしたことはない」様子で現在に至っている。

じつさい、トムが言うように、トムとデイジーの間には、ギャツビーには「知りようもないことがいくつもあり」、夫婦「二人にはそれをどうしても忘れられない」。トムが「カピオラニ」でデイジーを「抱えてパンチボウル山から下りてきた」ときの話をするだけでデイジーの心は揺らぐほどだ。夫婦が「どうしても忘れられない」時間を過ごしている間、ギャツビーはデイジーについての「切り抜き」を集め、大事に保存するしかなかった。プラザ・ホテルの部屋で、「あなたを愛したことはただの一度もありません」とトムに言うようにギャツビーから迫られたデイジーは「力なくしくしく泣き始め」、「彼(トム)を愛したこともかつてあった―でもそのときだっただけであつたことも愛していた」と言つてギャツビーを啞然とさせる。彼女にはギャツビーの五年間の意味がまったくわかっていない。彼は自分が耐えてきた孤独な五年間を解消するためには、どうしてもデイジーの一言が必要だと譲らない。

ギャツビーのことも愛して過ごしたと言うデイジーの五年間と、彼女との結婚だけを夢見ながら歯を食いしばっていたギャツビーの五年間は絶望的に異なる。以下は、ギャツビーとデイジーがニックの部屋で初めて再会した場面で、緊張がほぐれないために会話が進まず、場を和ませようとしたデイジーの発言にギャツビーが突つかかる場面である。

「私たち、長いあいだ会っていなかったのよ」とデイジーは言った。そんなのよくあることでしよう、という声で。

「今度の十一月で五年になる」

ギャツビーの返答に有無を言わせぬもの (the automatic quality) があつたせいで、僕らはそのあと少なくとも一分間くらい、揃つてもじもじと黙り込んでしまふことになつた。^(一一四)

この会話でわたしたちは二人の間にある超えることのできない五年間を認識する。ギャツビーの愛はどこまでも孤独だつた。「我々二人は変わることなく愛し合つてきた」と彼は言うが、その愛は二人で育んできたものではない。彼が一人で胸のなかで暖めてきたものである。否、愛と呼ぶべきですらないかもしれない。だからニックはこれを「幻想」、あるいは「ひとつの考え」「ひとつの夢」と呼ぶ。

彼は長いあいだ、ひとつの考えで頭をいっぱいにしてきた。ひとつの夢を最初から最後まで、飽きることなく頭の中で反復してきた。そのような常人の想像を超えた緊張に、いわば歯を食いしばって耐えてきたのだ。^(一一五)

「ひとつの夢」とはもちろん、「デイジーと結婚する」ことに他ならないが、奇妙にも、実際のデイジーを通り越してそのことが「頭の中で反復」されていたようだ。そのため、ようやく会えたデイジーがまばゆく見えるほどの喜びに打たれながらも、彼は目の前のデイジーよりも自身の思いにとらわれているように思われる。

ギャツビーの家の中をひとまわりしたあと、ニックとギャツビー、デイジーの三人は窓際に立ち並び、波の立った海峡を眺める。念願の再会を果たした幸福なひとときである。

「霧さえ出ていなければ、海の方かいにあなたのうちが見えるんだが」とギヤツビーが言った。「お宅の棧橋の先端には、いつも夜通し緑色の明かりがついているね」

デイジーはふいに、彼の腕に自分の腕をからめた。しかしギヤツビーは、自分が口にした言葉に深く囚われているようだった。その灯火の持っていた壮大な意味合いが今ではあとかたもなく消滅してしまったことに、自分でもおそらく思い当たったのだろう。デイジーと彼を隔てていた大きな距離に比べれば、その灯火は彼女のすぐ附近に――彼女に触れるくらいに附近にあるものとして見えた。月に対する星ほどに近いものと思えたほどだった。しかし今ではもう棧橋の先端についた、何の変哲もない緑色の灯火に戻っていた。彼が魅了されていた事物が、またひとつ数を減らしたわけだ。^(二二六)

ようやく会えた恋人が、対岸にある自分の家や棧橋の灯火を見つめていてくれたことに、心を動かされ、彼の腕に自分の腕をからめるデイジーの反応はごく自然で、彼女の愛を語って余りある。恋人の不在に耐え切れず、条件の良い別の男と「泣いて泣いて、泣きまくった」挙句、結婚したデイジーが、今・ここで手の届く傍らに恋人がいる喜びを噛み締める気持ちに欺瞞はない。ところがギヤツビーの想いは今・ここにはないのだ。対岸を見ながら、かつてデイジーを求めて両手を差し伸べ、身を震わせていた自身を懐かしんでいるのである。「魅了されていた事物」の魅了の根源の現前を素直に喜ばず、「魅了されていた事物」の消失を惜しむ恋人は文学のテーマとして珍しくはないとしても、「人生のいくつかの約束に向けて、ぴつたりと照準を合わせることのできるときすまされた感覚」^(二二七)を持つ恋人が、「常人の想像を超えた緊張に、いわば歯を食いしばって耐えてきた」^(二二八)到着地点が、愛の対象の不在の回顧になってしまうのだ。この皮肉な現実を前にすると、他の場所で語られたロマンスの主人公と、愛の対象の不在を惜しむ人物の間に違和感を覚えざるを得ない。

たしかに五年前の十一月の夜のギヤツビーとデイジーには今・ここで互いの現前しか望まない完璧な恋人たちとし

て愛し合つた過去がある。

ギャツビーは目の隅で、何ブロックも続く歩道がそのまま本当に一本の梯子になつて、樹木の上方にある秘密の場所まで通じているのが見てわかつた。もし一人だけで登るならそこに登ることができる。そしていったんそこに登つてしまえば、生命の糧に吸いつき、驚くべき利益を飲み干すことができる。

デイジーの白い顔が彼の顔に近づいてくるにつれて、彼の胸の鼓動は高まつた。彼にはわかつていた、この娘に口づけをし、言葉で言い表せない自分の夢を彼女のはかない息づかいに永遠に結びつけた (forever wed) ならば、彼の心は神の心と同じように、二度と跳ね回ることはない (never romp again) だろう。だから、星を打った音叉にもうひととき耳を濟ませ、彼は待た。それから彼は彼女に口づけをした。彼の唇が彼女の唇に触れた瞬間、彼女は彼のために花のように開花した。そうして化身は完結した (the incarnation was complete)。(1110)

これはギャツビーがニックに向かつて、「何もかも昔あつたとおりにしてみせます。彼女だつてわかつてくれるでしょう」と言つたあと、「過去について能弁に語つた」なかでの話をニックが物語つたものだ。この極度に美しくロマンチックなエピソードを語つたあと、ニックはいささか批判的に書く、「ギャツビーのそんな話に耳を傾けているあいだ、うんざりするほど感傷的ではあつたが (even through his appalling sentimentality) 、僕は何かを想い出させてられてゐた」。(1111) あまり文学的とは思われないギャツビーが五年前のロマンスをこつた繊細で美しい語彙を駆使して語つたとは信じ難いが、彼がデイジーと恋に落ちる以前の野心に彼一人の努力の結果として手に入れることができるはずの「驚くべき利益」を放棄し、デイジーという生身の女に自身の夢と未来を結びつける (wed) ことを選んだ決定的瞬間がここにある。注目すべきは、他の思い出において見られるようなギャツビーとデイジーの階層の差を際立たせる指標がここには一切ないことだ。孤独な野心の未来を断念し、今・ここを完全に共有している恋人たちの時間が最

高のタイミングで交わされた口づけによって完結し、一つの永遠となつてゐる。ギャツビーの夢とデイジーの呼気が永遠に結婚し (forever wed)⁽¹¹¹¹¹⁾、デイジーを花開かせる。この決定的瞬間はニックを戸惑わせ、発するべき言葉を失つた状態にさせるが、しかし同時に、過去において完結した幸福は反復不可能な取り返しのできない時間として、ニックにとっての失われた言葉 (a fragment of lost words)⁽¹¹¹¹²⁾と同様に永遠に伝達不可能な never (uncommunicable forever)⁽¹¹¹¹³⁾ 立ち消えてしまうことを予想させる。しかし、この永遠に伝達不可能な決定的瞬間こそがギャツビーのなかで戻るべき五年前の原点として見事に結晶化してしまつたのである。

じつさい、このような完結した幸福な瞬間が語られるのは一度切りあり、この他の場所ではどんなに幸福な時間も、常に苦しい現実的な条件に曝されている。「外地に送られる前日の午後」、愛し合つた二人は、「これほど親密に相手を肌身を感じたことはなかつたし、これほど密接に心を通じあわせたことはなかつた」という時間を共有するが、これは「明日からの長い別れのために、深い思い出をこしらえておかなくては」⁽¹¹¹¹⁴⁾ という差し迫つた状況に裏打ちされてゐた。

ここで恋人たちを引き離すのは戦争という社会全体の状況であるが、より多くの場合、二人を引き離すののとしてギャツビーを脅かしてゐたのは、デイジーとの間にある絶望的に大きな階層の違いであつた。

トムがデイジーと恋に落ちたとき、「彼は語るべき過去を持たぬ文無しの青年であり、(……) 彼女の手に触れる資格すら自分にはないのだと承知しながら (……) 自分を別の誰かに見せかけることで、彼女を手に入れた」⁽¹¹¹¹⁵⁾。「ギャツビーは安心感のようなものを計算ずくで彼女に与え、(……) 自分は彼女と同じ階層からやつてきた人間であり、後顧の憂いなく身を任せられる相手なのだと、デイジーに思い込ませたのである」⁽¹¹¹¹⁶⁾。つまり、五年前にデイジーが愛したのはノース・ダコタに貧農の両親を持つジェームス・ギャッツではなく、「同じ階層からやつてきた」ジェイ・ギャ

ツビーという「別の誰か」であった。デイジーに五年前のデイジーであることを要求する以上、ギャツビー自身も五年前にデイジーが信じたたとりの「同じ階層からやってきた別の誰か」のままでいなければならない。「過去を繰り返す」ことは、過去と現在を取り繕うことと同一である。「昔あったとおり」にすることがギャツビーの夢であるが、それは「昔あったとおり」の嘘の自分、「別の誰か」に戻ることなのだ。

物語の最初の方でニックは、ギャツビーについて、「もし人格というものが、人目につく素振り（ジェスチャー）の途切れない連続であるとすれば、この人物にはたしかに驚嘆すべきものがあつた」と述べているが、ギャツビーのこれまでの半生は「別の誰か」の素振りの絶え間ない連続であつた。

振り返って見れば、ギャツビーは一九〇六年九月十二日に、一日の時間の使い方についてベンジャミン・フランクリン風の詳細な「スケジュール」を書いた子供時代から、「別の誰か」になるための努力を営々と続けてきた。「別の誰か」の実態にその時分から「ぴつたりと照準を合わせ」ていたわけではないが、ノース・ダコタの無教養・無資産の貧農の息子という生来の条件から抜け出すことが彼の悲願であつた。それが十七歳で「ダン・コーデリーのヨットがスペリオル湖の、油断ならない浅瀬に錨を投じるのを見かけた瞬間」が彼の「人生の新しい展開の端緒」となつた。本当の両親から自らを切り離れた彼は、この鉱山王のもつで、「卑しく、けばけばしく、とどまるところを知らぬ美に仕える」ことで「ジェイ・ギャツビーなる人間を創造した」のだ。

「話題というものをろくすっぽ持たず」、ニックをがっかりさせたことのあるギャツビーが、自分の過去を語るにあつてどのような言葉を使ったかは定かではない。しかしニックはギャツビーが明かしてくれた半生を、『イェール大学新聞』の連載論説で鍛えた豊饒な語彙で人間形成と恋愛の物語として再構築する。これまで見てきたように、生

活者としてのニックは衝動的で幼稚で意地悪な発言の多い人物であるが、ギャツビーの心が「きわめてグロテスクで幻想的な様々の奇想」^(三三三)に支配されていたとしても、あるいはギャツビーが脳裏に紡ぎ出すものが「言葉にできないほどの俗悪なるものの宇宙」^(三三四)であったとしても、物語の書き手としてのニックは、主人公の壮絶な努力に対する敬意を惜しまない。しかし、ギャツビーの努力がフランクリン流の立身出世とユーリタンの節制に捧げられていただけであれば、ニックの敬意を勝ち得ることはなかったであろう。ギャツビーがデイジーと出会わなければ、大酒呑みで女に弱いコーディーを他山の石とし、「酒を遠ざける習慣を、用心深く築き上げ」^(三三五)、こつこつと財を成すか、あるいは彼の実父が期待していたように「人の先に立つ」^(三三六)人間として大成していたであろうが、ニックを惹きつけることはなかったはずだ。

デイジーと出会い、恋に落ちる以前のギャツビーにとって、彼が目指す「別の誰か」とは、単に裕福で社会的な地位のある人間という程度のものであった。ニックは、恋に落ちたときの心境をギャツビー自身に語らせる。

デイジーを愛しているとわかって、(……) 私は野心なんぞ放つたらかしにして、日ごとに深く恋に落ちていった。そしてあるとき、もうかまうものかと腹を決めた。偉業を達成することにどんな意味があるだろう。自分がこれかなそうと目論んでいることを、彼女に語っている方が遙に楽しいというのに^(三三七)

ゴードイーと出会った頃の「人並みはずれた野心を抱いて」いた十七歳の少年が大人になって、恋に「ぴつたりと照準を合わせ」た瞬間である。十七歳でジェームス・ギャツからジェイ・ギャツビーに変身した彼は、今度はデイジーと「同じ階層からやってきた」「別の誰か」としてのジェイ・ギャツビーなるものに変ったのだ。「自分がこうしてデイジーの家の中にいるのは、何かのとてもない間違いによるものだということが、彼にはよくわかっていた」^(三三九)。そうして彼は「自分に与えられた時間を、できる限り有効に利用し、(……) 食欲に無節操に、手に入られるもの

は片端から手に入れ、(……) 最後にはついに、ある密やかな十月の夜に、デイジーさえも我がものにした。彼女の手に触れる資格すら自分にはないのだと承知しながら、いや、してあればこそ、彼はデイジーを手に入れたのだ。^(三四〇)

以前のギャツビーの野心が社会的な成功を収め、偉業を達成することにあつたとしたら、デイジーと出会つた彼の野心は、名実ともに彼女を手に入れること、すなわち、「生まれて初めて知つた「良家の」娘」^(三四一)と結婚することとなる。

彼はデイジーが普通の娘でないことはわかつていたが、しかし「良家の」娘がどれくらい普通でなくなれるかというところまではわかつていなかった。彼女がその豪華な家の中に、豊かで満ち足りた暮らしの中に消えてしまうと、ギャツビーには何も残してくれなかった。彼は彼女と結婚したいと思つた。それがすべてだつた (that was all)。^(三四二)

たしかに、五年前のギャツビーは目の前にいるデイジーを切ないほど愛していたが、その愛が「別の誰か」になるための壮絶な努力の一環に組み込まれていることに気づかざるを得ない。彼女との階層の差異を意識することが、彼女を手に入れること、彼女と結婚することと緊密に結びついている。大金持ちになつた現在に至つても、彼女の持つ意味は変わらない。ニックは「低いスリリングな」^(三四三)デイジーの声の魅力を高く評価し、何度も言及するが、彼にとつてそれは肉感的で音楽なようなものである。

僕は思うのだが、彼(ギャツビー)の心を何より強く掴んでいたのはデイジーの声の中にある、ふらふらと揺れる、ほとんど発熱に近い温もりであつたに違いない。なぜならその声だけは、どれほどの愛をもつても凌駕することのできない特別なものであつたからだ。その声はまさしく不死の歌だつた。^(三四四)

いっぽう、ギャツビーはまったく別のことを言う。以下は、ニックとギャツビーの会話である。

「彼女の声には何か無分別なものがあるね」と僕は指摘した。「あの声には——」そのあとの言葉を僕はためらつた。

「彼女の声にはぎつしり金^{かね}が詰まつている」とギャツビーはあつさりと言つた。

まさにそのとおりだ。でも彼に言われるまでそのことを思い至らなかった。そう、そこには金^{かね}が詰まっていた。王様の娘にして黄金色の少女^(二四五)：

デイジーと別の階層から来たギャツビーは、ニックには聞き取ることのできない意味をデイジーの声から聞き取る。デイジーがギャツビーを魅了する大きな要因が二人の出自の差異であることは明白だ。この差異があつてこそ、ギャツビーはデイジーのために「別の誰か」になるための努力に自らを駆り立てるのだ。しかし、彼の努力はトムをして「サーカス馬車^(二四六)」と呼ばれる^(二四六)こてこてした高級車や、やはりトムの失笑を買う「ピンクのスーツ^(二四七)」同様、デイジーとの再会当日も「特殊な社会」の人間や「人間の基本的な良識や品位」のある育ちの良い人間には不可能な行動を彼に取らせてしまう。

再会の当日、ニックは自宅から二人と一緒に、隣のギャツビーの屋敷に行く。三人は近道をせずに通用門から屋敷に入る。庭園の花々や館の中世風の輪郭をデイジーに見せるためだ。他に人影のない屋敷に足を踏み入れると、ギャツビーは一部屋ずつデイジーを案内して回る。彼は屋敷内では、「ひとときたりともデイジーから目をそらさなかった^(二四八)」。ニックの推察によれば、「屋敷の中にあるすべてのものを、それらがどれほどの反応を彼女の愛しい瞳から引き出せるかによって、あらためて評価^(二四九)しておいた」のである。

野間がいみじくも指摘するように「デイジーに自分の屋敷を見てもらいたい^(二五〇)」がために、それも「真正面から光を受けているところ」を見せるために、ニックの家を再会の場所を選んだギャツビーは、自分の邸宅に対するデイジーの「値踏み^(二五一)」を求めているのだ。ギャツビーが以前にニックに説明したような遺産相続によつてではなく、「三年掛り^(二五二)で稼いだ金^(二五三)」で買った財産の評価を望んでいる。不審に思ったニックが仕事の内要を問うと、ギャツビーは緊張の

あまり不用意にも「そいつは君の知ったことじゃない (That's my affair)」⁽¹¹¹¹⁾と思わず答えてしまい、慌てて取り繕う。「薬品関係」や「石油関係の仕事」⁽¹¹¹²⁾をしたと言うが、おそらくは「他人に口外してもらっては困る」⁽¹¹¹³⁾ような仕事で築き上げた富だからこそ、「他人の値踏み」⁽¹¹¹⁴⁾が必要なのだ。遺産相続による富豪ではないトリマルキオのギャツビーは、「他人の値踏み」、とりわけ「良家の」娘 (a "nice" girl)⁽¹¹¹⁵⁾であるデイジーの「値踏み」がなければ価値の確認ができない。

さらに、ここでもニックがギャツビーにこのうえなく上手く利用されていることを野間指摘する。ギャツビーがニックの家を選んだのは建築学的理由だけではない。デイジーを連れて行く際にニックの同伴に拘ったのと同様、デイジーの従兄弟で良家の子弟であるニックの友人という肩書きが有効だったからだ。ニックの友人であるということとは成金アウトローのギャツビーにとって「人間の基本的な良識や品位」のささやかな保証となる。そうした意味では彼は誰よりもニックを高く理解し、評価していたと言えるだろう。じつさい、彼の評価は正しかった。頼まれもしないのに責任を持って彼の葬式を遂行し、死後も付き添うことになるのはニック一人であった。「人生のいくつかの約束に向けて、ぴったりと照準を合わせることでできるときすまされた感覚」⁽¹¹¹⁶⁾によって彼はニックを選んだのだ。彼は五年前と同じように「彼女の手に触れる資格すら自分にはないのだ」という気持ちを忘れていない。否、アウトローとして成り上がったことでますますその「資格」⁽¹¹¹⁷⁾を失っていることを知っているはずだ。無邪気なデイジーも五年前よりは「世間ずれし (I'm sophisticated)」⁽¹¹¹⁸⁾している。だからこそ、見せるべきものを見せ、都合の悪い過去を隠さなければならぬ。ニックとの交友はデイジーに見せるべきものの筆頭であった。ニックは、ギャツビーがデイジーの信頼を得るための唯一の頼みの綱だ。とはいえ、都合の悪い過去の痕跡は至るところにある。ダン・コーディーの写真を飾った壁の傍のチェストの上に「ヨット乗りのかつこうをしたギャツビーの小さな写真」を置いているが、デイ

ジーが「まあ、素敵！この髪型！あなたが髪をすっかりバックにしていたなんて知らなかったわ。それにヨットのことも」、と声を上げると、ギャツビーは「急いで話を变え」てしまふ。^(二六三) ギャツビーがデイジーの前に軍服姿で現れる以前の時代は消去しなければならない過去だからだ。

ニックがギャツビーのこうした悲壮な努力の過去を知るのは、「ジェイ・ギャツビー」なる存在がトムの冷酷な悪意の前に、ガラスのごとくもろく砕け散り」、その「突飛で謎めいた大芝居 (the long secret extravaganza) が終わりを迎えた」、^(二六四) あとのことであるが、ニックはギャツビーの人生を知る以前からいかに利用されようともギャツビーの恋の成就を願い、常軌を逸した派手な生活や趣味に違和感を覚えようとも、一貫してギャツビーに寄り添おうとしていた。それでも時としてギャツビーの趣味がニックの許容範囲を超える場合がある。ニックは彼の悪趣味に飾り立てた、「こつてりとしたクリーム色の車」^(二六四) や「白いフランネルのスーツに銀色のシャツ、金色のネクタイ」を気に入らずはないが、それでも語り手としての誠意を込めて具対的に描写していた。ところが、トムとの最後の対決でギャツビーがピンクのスーツを着ていたことをわたしたちが初めて知るのは、車でニューヨークに向かうトムの、「オックスフォード出だーとんでもない、ピンクのスーツを着ているというのに」^(二六五) という発言によつてである。出発以前、ブキヤン邸でのランチの間もずっと同じものを着ていたはずであるが、ニックはギャツビーのスーツの色について一言も言及しない。饒舌なニックが黙殺するということは、これまで見てきたように、語りたくないことだからである。すなわち、トムとマートルの性行為や自身とマッキーの性行為、ギャツビーが住んでいた屋敷の階段に子供の書いた落書きと同様に、言葉にしたくないほどの軽蔑、あの「掛け値なしの軽蔑 (an unaffected scorn)」を覚えたからである。このときのニックにとってはスーツの色を語らないことが彼自身の掛け値なしの軽蔑を黙殺し、できるならトムの軽蔑からギャツビーを守ることだったのだ。

ニックが彼のスーツの色を名指すのは、ギャツビーがトムに敗北し、彼が担つていた夢の輝きも消え失せ、そのうえ、マートルを轢き殺した犯人だと思つていたことである。トムの車でジョーダンと一緒にブキャナン邸に戻つたニックは、タクシーを待つ間に庭園に潜んでるギャツビーを見つける。そのとき、ニックの「頭に浮かんだのは、月光の下で彼のピンクのスーツはずいぶん派手に光るなということだけだつた」。(二六六)ここに初めてピンクのスーツに対する嫌悪感が浮かび上がる。ニックはギャツビーが潜んでいるのを「卑しむべき行いであるように」思い、「これから(……)この家に泥棒に入ろうとしているのではまいか」と考えるほどである。あるうことか、「背後の暗い灌木のあいだに「ウルフシャイムの一味」の凶悪な顔が見えたとしても、僕は驚かなかつたはずだ」、とさえ書く。轢き逃げ事件を知つたあとであり、ニックは完全にトムの言葉に支配されている。ギャツビーはもはやならず者の人殺し、轢き逃げ犯でしかない。ところが、言葉を交わしているうちに、ギャツビーがデイジーの轢き逃げを庇い、彼女がトムに「苦しまれたらしいように」寝ずの番をしていることを知る。(二六七)

そこで、ニックが彼のためにブキャナン夫妻の様子を見に行くと、キッチンテーブルを挟み、向かい合っているのが見える。トムの手がデイジーの手に重ねられ、二人とも「幸福そうにはみえなかつた」が「どちらもとくに不幸ともみえなかつた。その構図には、見違えようもない自然な親密さがうかがえ、(……)今何ごとかを共謀している」ようであつた。(二六八)このときすでに、ギャツビーへの信頼を取り戻しているニックは、夫妻の間にあるテーブルの上に置かれた「冷めたフライド・チキンの皿」に言及することを忘れない。この不味そうに冷えたフライド・チキンこそが、デイジーに対するニックの失望と軽蔑の象徴になるからだ。ニックはギャツビーに不穏な様子はないことを告げるが、ギャツビーは「デイジーがベッドに入るまではここにいたい」と言つて、「僕がそばにいるとその寝ずの番の神聖さが損なわれてしまふかのように、彼は真剣な目つきで屋敷の監視に戻る」。(二六九)ここにおいてニックの彼に対する敬意は失つ

ていた分を取り戻すかのように高まる。冷めたフライド・チキンほどの価値もないデイジーのために寝ずの番をするギャツビーに「神聖さ」を認め、ニックは書く、「だから僕は月の光の下に立って、クズ同然のものを見守る (watching over nothing) 彼を残して立ち去った」⁽¹⁷¹⁾。

またしてもニックの衝動的と言つてよいほどの心の動きのなかでギャツビーが毀誉褒貶にさらされるのを見る思いがするが、ギャツビーにとつての「寝ずの番」がニックが考えているような「神聖さ」、「クズ同然のものを見守る」愛情のためだけとは考え難い。これはむしろ、「あなたを愛したことはただの一度もありません」とトムに向かつてデイジーに無理やり言わせようとするギャツビーの行動方針の一つの表現ではないだろうか。

ギャツビーのことを氣遣うニックは、彼が寝ずの番から戻ってきたのを見計らい、彼の家に向いて逃亡を勧める。もちろん、彼はニックの勧めを拒否する。ニックはギャツビーの拒否に自身の推測を混じえて書く、「そんなことは論外だ。デイジーをあと残して行ってしまうわけにはいかない。彼女のこれからの身の振り方もわからないというのに。ギャツビーは最後の藁にしがみついていたし、そこからもぎはなすのは無理な相談だった」⁽¹⁷²⁾。たしかにギャツビーが諦めていなかったことは否定できない。「ジェイ・ギャツビー」なる存在がトムの冷酷な悪意の前に、ガラスのごとくもろく砕け散った」⁽¹⁷³⁾。あとのギャツビーはこのあと、「ダン・コーデーがらみの不思議な物語」と「デイジーのこと」をニックに語り聴かせるが、話し終えたあとも、「彼女があつたことを愛したこともあつたかもしれない。結婚しはすだよ」、となおも繰返し、「むろんちよつとのあいだくらい、あの男を愛したこともあつたかもしれない。結婚した当座はね。でもその頃だつて、あいつなんかより私の方を愛していたことは確かだ。そうとも」と続けて言う⁽¹⁷⁴⁾。これだけなら、ニックの言うとおり、「ギャツビーは最後の藁にしがみついていた」⁽¹⁷⁵⁾。ただ、ところが、そのあと、「出し抜けに不思議な台詞を口に」して、ニックを驚かす。「ともあれ、そんなことは私事に過ぎなかった (it was just

personal」⁽¹¹⁷⁾と彼は言うのだ。

たしかにニックならずとも解釈に苦しむ発言である。結婚当時のデイジーのトムに対する短い愛情のことを指しているのは間違いないが、それに対してギャツビーとの愛が公的 (official) だということにはならない。ニックはこれを「この問題についての彼の想念には、測りしれぬほど烈しいものがあつたと推測する以外にないのだ」、と片付ける。^(117A)

もちろん、「測りしれぬほど烈しい想念があつた」に違いないが、烈しさや強度の問題だけではなく、personal という語が新聞の「個人消息欄 (personal column)」という語に使われることも考慮するべきではないか。ギャツビーがデイジーと再会するまでのあいだ、デイジーに関する新聞の切り抜きを収集していたことはすでに述べた。したがって、ギャツビーが言うところの結婚当初のトムへのはかない愛をデイジーの細々とした日常生活の断片の一つとして処理してしまおうという意図として理解したい。

じつさいには砕け散ってしまったものの、ギャツビーの頭の中では自分とデイジーの結晶化した恋の堅牢さを基準にすれば、結婚当初の心の揺れは例外的な乱れでしかない。デイジーにみんなの前でトムに「あなたを愛したことはただの一度もありません」と言わせようとするギャツビーである。彼のこの苛酷なまでの強情さは、轢き逃げ犯にされようとしている状況の最中、「デイジーもきつと電話をかけてくるはずだ」⁽¹¹⁸⁾と自分で言いながら、「電話回線をデトロイトからの長距離電話のために、ずっと空けてある」こと、すなわち、仕事を優先させていることと無関係ではあるまい。デトロイトというのは、彼がデイジーと最初に再会し自邸に連れてきたときに、掛かっていた電話に対する

彼の、「もしデトロイトを小さな町だと考えるなら、要するにあの男も使い物にならないってことじゃないか……」^(118A)という返答のなかに出てきた地名である。おそらくはギャングとしての商売取引の用件に違いない。ギャツビーの日常生活はアウトロー社会との電話で寸断されていた。じつさい、彼が死んでも「スレイグル」と名乗るギャング

らしき男がシカゴから電話を掛けてくるほどである。フランクリン流の勤勉さがアウトローとなった彼の骨の髄まで浸透しているのだ。^(一八三)

この冷徹さはニックにはない。この日の朝、「ニューヨークに行きたくなかった。仕事ができるような状態でなかったのは確かだが、(……) 僕としてはギャツビーをここに残していきたくなかったのだ。その予定の列車を見送った。次の列車も見送った。それからようやくあきらめて腰を上げた」^(一八三)、というニックはビジネスに徹することができない。職場についてからも、彼は「回転椅子の上でうとうと眠り込んでしまった」^(一八四)という怠慢さだ。ギャツビーに「四度」も電話をかけてみるがつかない。デトロイトからの回線を空けて仕事をしているからだ。何があろうと、どんな状況に自分があるうと勤勉に努力を重ねる。これがギャツビーの鉄則だ。こうしたルールから外れるものを新聞の個人消息欄レベルの過去、「私事」と彼は呼ぶのではないか。^(一八五)

こうした厳格さは優等生のニックには無縁のものだ。だからこそ、「弔電ひとつ、花ひとつ送ってこなかった」^(一八六)デ이지ーのために寝ずの番をしたギャツビーの尊さが格上げされ、弔問客のいない葬儀にあたっては、自身がギャツビーの濡れ衣を放置したにも拘わらず、否、放置したからこそ、「君のために誰かを呼んであげるよ、ギャツビー。だから心配しなくていい。僕がちゃんとしかるべき人を呼んであげるから、大丈夫だよ」^(一八七)、と心のなかで語り掛けるのだ。ニックは「ねえ、オールド・スポーツ、僕のためにまともな弔問客を連れてきてくれ。頼むから誰か見つけてきてくれないか。こんな風に一人で置かれたちやたまらないよ」という「ギャツビーの抗議の声が響いていた」^(一八八)、と書くほど感傷的である。しかし、ギャツビーが置き去りにされるのは、轢き逃げ事件の後や死んでからだけではい

夏のある日曜日の午後、ニックがギャツビーの家に行ったとき、トムが三人連れで馬に乗って訪れる。そばを通りかかって「何か飲ませてもらおう」ということになったという。ギャツビーがもてなすと、そのうち、三人うち

一人の女性がギャツビーとニツクを夕食に誘う。ニツクは断るが、ギャツビーは行く気になる。おそらくはデイジーの夫に興味を持ったからだ。ところが、トムともう一人の男性が強く反対する。車であとからついていくつもりで準備をしたギャツビーが「玄関に現れたときには、彼らの姿は既に八月の濃い緑陰に消えていた」。「帽子をかぶり、軽いコートを手にしたギャツビー」は見事に置き去りにされる。「特殊な社会」の人々はギャツビーのような成り上がり(二九〇)の家に「何か飲ませてもらおう」と立ち寄ることはあっても、また気まぐれに招待してみることはあっても、ともに付き合うつもりはない。「特殊な社会」の仲間入りを許さないのである。彼らは常にギャツビーを置き去りにするのだ。

ギャツビーの冷徹さを記述することはできても、理解することはできないニツクは、ギャツビーに対する根本的な「軽蔑」を忘れることがないまま、緑の灯火に腕を差し伸べるギャツビー、クズ同然のものを見守るギャツビーへの共感**は惜しまない**。だからこそ、感情移入によつて出来事の意味、世界の意味、自然の意味まで変えてしまう。ギャツビーが仕事のために電話回線を空けていたことを知りながら、ニツクは書く。

僕は思うのだが、そんな（デイジーからの）電話がかかってくるとはギャツビー自身ももう期待していなかったし、かかってきてもこなくても、どちらでもかまわないという気になっていたのではあるまいか。もしそうだとしたら、かつての温もりを持った世界が既に失われてしまったことを、彼は悟っていたに違いない。たつたひとつの夢を胸に長く生きすぎたおかげで、ずいぶん高い代償を支払わなくてはならなかったと実感していたはずだ。彼は威嚇的な木の葉越しに、見慣れぬ空を見上げたことだろう。そしてバラというものがどれほどグロテスクなものであるかを知り、生え揃っていない芝生にとつて太陽の光がどれほど荒々しいものであるかを知って、ひとつ身震いしたことだろう。その新しい世界にあつてはすべての中身が空疎であり、あわれな亡霊たちが空気のかわりに夢を呼吸し、たまさかの身としてあたりをさすらつていた……ちようどまとまりなく繁つ

た本立を抜けて彼の方に忍び寄り、灰をかぶったような色合いの奇怪な人影のごとく。^(二九二)

これはマートルの夫ウィルソンに殺される直前のギャツビーをニックが想像で描いた描写である。引用部最後の「奇怪な人影」はウィルソンに他ならない。同じ日の朝、ギャツビーといっしょにニックが見たときはこの上なく美しかった場所だ。「朝露の上にあつたという間に樹影が落ち、緑陰のあいだで姿なき小鳥たちが歌をにぎやかにさえずりだした。緩く心地よい空気の動きがあつた。風とも呼べないほどのものではあるが、涼しげな美しい一日をそれは約束していた」。^(二九三)ギャツビーの死とともに、「緩く心地よい空気」も「涼しく美しい一日」も消え失せ、「かつての温もりを持った世界」が失われてしまう。「かつては世界の心温かき中心であつた中西部」が「宇宙のギザギザな果ての断崖」に変わってしまったから東部に出てきたニックであつたが、ギャツビーの死とともに、東部も「温もり」を失い、「うす気味の悪い場所になりはてしまった」。^(二九四)

もう東部には未練はない。東部を引き上げる前に、彼はニューヨークでトムと偶然出会う。マートルを轢き殺したのがデ이지ーだとは知らないまま、トムはギャツビーを恨んでいる。ニックが「口が裂けても」真相を言うつもりがないことはすでに述べたとおりだ。しかし、「彼を許すことができない」ニックは書く、「すべてが思慮を欠き」(careless)、混乱の中にあつた。トムとデ이지ー、彼らは思慮を欠いた人々 (careless people) なのだ。いろんなものごとや、いろんな人々をひつかきまわし、台無しにしておいて、あとは知らん顔をして奥に引つ込んでしまう一彼らの金なり、測りがたい無思慮 (their vast carelessness) なり、あるいはどんなものかは知れないが、二人をひとつに結びつけている何かの中に」。^(二九五)ここに東部で彼が付き合ってきた「特殊な社会」の二人に対する嫌悪感が激しく表明されているが、注目すべきは「思慮を欠く (careless)」という表現の繰り返しである。そしてこの無思慮という意味が道徳的に使われていることである。

ニックによれば「思慮を欠く (carelesse)」のはトムとデイジーに限らない。ジョーダンが車を運転していて、道路で作業している男の上着のボタンをフェンダーにひっかけてしまったときのニックとの会話を思い出そう。彼女の雑な運転を詰るニックに向かって、相手が退いてくれるから事故にならないとジョーダンは主張する。そこでニックが言う、「じゃあもし君が、君と同じくらい不注意な人間 (somebody just as carelesse as yourself) にぐくわしたとしたら、そのときはどうなるんだろう?」。彼女の答えは、「私としちゃ、そういうことが起こらないことを願うのみね。不注意な人たちについていい好きかない (I hate carelesse people)」。(二九六) この「不注意」も道德的な意味を帯びていることは言うまでもない。このときのニックは「女の不正直さ (dishonesty)」というものを「深くは考えなかつた」。(二九九) しかし、ギャツビー亡き今、「不注意＝無思慮」は憎むべき悪徳となる。「うす気味悪い場所」に成り果てた東部を離れる前に、ニックはジョーダンに別れを告げるが、別れ際に彼女は自分の欠点を思い出させるかのようにニックに言う、「どうやら私はもう一人の下手なドライバーに出くわしたいね。そう思わない? こんなはずれな思いこみをするなんて、不注意 (carelesse) だったわ。私はね、あなたは正直 (honest) で曲がつたところのない人だと見ていた」。(三〇〇)

東部で実際のあつた人間も社会すべて嫌になつたニックは自らを「田舎もの」と定義する。先に引用したニューヨークで、トムはデイジーがマートルを轢き殺したことを知らず、罪の意識がないまま、ニックと少し話した後で握手を求める。ニックは我慢して応じるが、無責任で無自覚なトムは「僕の田舎もの特有のこだわり (my provincial squeamishness) なんか、あつという間に忘れて」宝飾店に入つて行く。こゝで「田舎もの」とは「九月の暖かい日だというのに、丈の長い安物の厚いコートに身を包んで」(三〇一) ミネソタの小さな町から息子の葬式にやつて来た、ヘンリー・C・ギャッツを想起させる。

ニックは「田舎もののこだわり」を抱えて故郷に戻るしかない。ギャツビーの厳しい冷徹さはニックには最後まで理解できなかったが、その過酷な冷徹さこそが「ずっと昔に忘れられていた夢」を信じる力となり、狂おしくギャツビーを駆り立てていったのだ。

ギャツビーは緑の灯火を信じていた。年を追うごとに我々の前からどんどん遠のいていく、陶酔に満ちた未来を。それはあのとき我々の手からすり抜けていった。でもまだ大丈夫。明日はもっと速く走ろう。両腕もつと先まで差し出そう。……そうすればある晴れた朝に――⁽¹⁰¹¹⁾

注

- (一) Gustave FLAUBERT, *Madame Bovary, Œuvres I*, Bibliothèque de la Pléiade, 1977, p.293.
- (二) *Ibid.*, p.327.
- (三) 野間正二、『グレート・ギャツビー』の読み方、創元社、二〇〇八年、92。
- (四) 同書、93。
- (五) ブラム・ストーカー著、新妻昭彦訳、丹治愛注『ドラキュラ』、水声社、二〇〇〇年。
- (六) 武藤浩史、『ドラキュラ』からブングク、慶應義塾大学教養研究センター叢書、二〇〇六年、41―46。傍線強調は論者。
- (七) ブラム・ストーカー著、新妻昭彦訳、丹治愛注『ドラキュラ』、水声社、二〇〇〇年、本文53、訳注408。
- (八) スコット・フィッツジェラルド 村上春樹訳『グレート・ギャツビー』中央公論新社、二〇〇六年、277―278、傍点強調は訳文。傍線強調は論者。
- (九) 同書、278。
- (一〇) F.Scott FITZGERALD, *The Great Gatsby*, Cambridge University press, 1991, p.7. イタリック強調は論者。
- (一一) 村上春樹訳『グレート・ギャツビー』、17。

- (二二) 同書、243。
- (二三) 同書、167。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.70.
- (二四) 同書、21。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.10.
- (二五) 同書、18。
- (二六) 同書、18。
- (二七) 同書、15。
- (二八) 同書、12。
- (二九) 同書、訳者村上春樹による註、20。
- (三〇) 同書、169。
- (三一) 同書、88。
- (三二) 同書、94—95。
- (三三) 同書、85。
- (三四) 同書、66。
- (三五) 同書、83。
- (三六) 同書、115。
- (三七) 同書、175。
- (三八) 同書、35。
- (三九) 同書、39。
- (四〇) 同書、20。
- (四一) 同書、28。
- (四二) 同書、40。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.17. 傍線強調、イタリック強調は論者。
- (四三) 同書、61。
- (四四) 同書、59。

- (三五) 同書、62。
 (三六) 同書、56。
 (三七) 同書、57。
 (三八) 同書、58。
 (三九) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.24.
 (四〇) 村上春樹訳『グレート・ギャツビー』、66。傍点は訳文。
 (四一) 同書、62。
 (四二) 同書、72。傍点強調は論者。
 (四三) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.30。傍線強調は論者。
 (四四) 『グレート・ギャツビー』、98。
 (四五) 同書、64。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.27。傍線強調・イタリック強調は論者。
 (四六) 同書、68。
 (四七) 同書、69。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.29。
 (四八) 同書、69。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.30。傍線強調は論者。
 (四九) 同書、70。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.30。
 (五〇) 同書、53。
 (五一) 同書、60。
 (五二) 同書、95。
 (五三) 同書、80。
 (五四) 同書、77。
 (五五) 奥書、95。
 (五六) 同書、84。
 (五七) 同書、85。

- (五八) 同書、86。傍線強調は論者。
(五九) 同書、139—145。
(六〇) 同書、139—145、180—185、203—204、265—273、275—276。
(六一) 同書、205。トリマルキオとはベトロニウスの「サテリコン」に登場する豪華な饗宴を提供する解放奴隷の名前。
(六二) フィッツジェラルド著、佐伯泰樹編訳「リッツ・ホテルほどもある超特大のダイヤモンド」『フィッツジェラルド短編集』岩波書店、二〇〇六年、28。
(六三) 同書、53。
(六四) 同書、31—32。
(六五) 同書、42。
(六六) 同書、75。
(六七) 同書、77。
(六八) 同書、41。F.Scott FITZGERALD, *The Diamond as Big as the Ritz*, in *The Collected Short Stories of F. Scott Fitzgerald*, Penguin Books, 1986, p.90. イタリック強調は論者。
(六九) 『グレート・ギャツビー』、185。F.Scott FITZGERALD, *The Great Gatsby*, Cambridge University press, 1991, p.78. イタリック強調は論者。
(七〇) 『グレート・ギャツビー』、19。
(七一) 「リッツ・ホテルほどもある超特大のダイヤモンド」、41。
(七二) 同書、42。
(七三) 『グレート・ギャツビー』、32。
(七四) 同書、32。
(七五) 同書、236。F.Scott FITZGERALD, *The Great Gatsby*, *ibid.*, p.101. 傍線強調は論者。
(七六) 同書、236。
(七七) F.Scott FITZGERALD, *The Great Gatsby*, *ibid.*, p.101. 傍線強調は論者。

- (七八) 『グレート・ギャツビー』、10。
 (七九) 同書、121。
 (八〇) 同書、122。
 (八一) 同書、123—124。
 (八二) 同書、129。
 (八三) 同書、9。
 (八四) 同書、10。
 (八五) 野間正二、前掲書、52。
 (八六) 『グレート・ギャツビー』、260—261。
 (八七) 同書、250。
 (八八) 同書、250。
 (八九) 同書、250。
 (九〇) 同書、322。
 (九一) 同書、112、傍線強調は論者。
 (九二) F.Scott FITZGERALD, *The Great Gatsby*, *ibid.*, p.126。
 (九三) 『グレート・ギャツビー』、149—147。
 (九四) 同書、15。
 (九五) F.Scott FITZGERALD, *The Great Gatsby*, *ibid.*, p.7. 和訳・イタリック強調は論者。
 (九六) *ibid.*, p.6. イタリック強調と傍線強調は論者。ただし傍線強調部の和訳「宇宙のギザギザな果ての断崖」は、野間正二、前掲書、124による。
 (九七) 同書、13。
 (九八) 同書、13。
 (九九) 同書、13。

- (一〇〇) 同書、14。
- (一〇一) 同書、14。
- (一〇二) 同書、14。
- (一〇三) 同書、14。
- (一〇四) F.Scott FITZGERALD, *The Great Gatsby*, *ibid.*, p.7.
- (一〇五) 同書『グレート・ギャツビー』、225—226。
- (一〇六) 同書、154。
- (一〇七) 同書、93。F.Scott FITZGERALD, *The Great Gatsby*, *ibid.*, p.40, 傍線強調、イタリックは論者。
- (一〇八) 同書、80。傍線強調は論者。
- (一〇九) 同書、81。傍線強調は論者。
- (一一〇) 野崎孝訳『グレート・ギャツビー』新潮文庫、一九九四年、14。傍線強調は論者。この部分は野崎孝の訳の方が文意を正確に伝えているように思われるので、こちらを参照した。
- (一一一) 村上春樹訳『グレート・ギャツビー』、39—40。
- (一一二) 同書、44。傍線強調は論者。
- (一一三) 同書、83。
- (一一四) 同書、92—93。
- (一一五) 同書、93。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.40, 傍線強調・イタリック強調は論者。
- (一一六) 同書、183—184。傍線強調は論者。
- (一一七) 同書、94。
- (一一八) 同書、46。
- (一一九) 同書、101。
- (一二〇) 同書、101—102。
- (一二一) 同書、102。傍線強調は論者。

- (一二二) アラン・フルニエ『グラン・モーヌ』(一九一三年)の語り手。主人公オーギュスタン・モーヌを兄のように慕う。
- (一二三) 村上春樹訳『グレート・ギャツビー』、9。
- (一二四) 同書、121。
- (一二五) 同書、123。
- (一二六) 同書、124。
- (一二七) 同書、124—125。傍線強調は論者。
- (一二八) 同書、125。傍線強調は論者。
- (一二九) 同書、125。
- (一三〇) 同書、126。
- (一三一) 同書、128。
- (一二二) 同書、127。
- (一二三) 同書、133—134。
- (一二四) 同書、138。
- (一二五) 野間正二、前掲書、112—115。
- (一二六) 同書、180。
- (一二七) 同書、183。
- (一二八) 同書、137。
- (一二九) 同書、307。
- (一四〇) 同書、108。
- (一四一) 同書、60。
- (一四二) 同書、53。
- (一四三) 同書、54。F.Scott FITZGERALD, *The Great Gatsby*, *ibid.*, p.23.
- (一四四) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.26.

- (一四五) 『グレート・ギャツビー』、59。傍線強調は論者。
- (一四六) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.26.
- (一四七) 『グレート・ギャツビー』、60。
- (一四八) 野間正二、前掲書、73—74。
- (一四九) 野間、同書、72。
- (一五〇) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.26。傍線強調・イタリック強調は論者。
- (一五一) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.32.
- (一五二) 『グレート・ギャツビー』、74。
- (一五三) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.32.
- (一五四) *ibid.*, p.26.
- (一五五) *ibid.*, p.32.
- (一五六) *ibid.*, p.63.
- (一五七) *ibid.*, p.63.
- (一五八) *ibid.*, p.65. 『グレート・ギャツビー』、153。傍線強調・イタリック強調は論者。
- (一五九) *ibid.*, p.65.
- (一六〇) 野間正二、前掲書、80。
- (一六一) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.32. 『グレート・ギャツビー』、75。
- (一六二) 『グレート・ギャツビー』、189。
- (一六三) 同書、207。
- (一六四) 同書、29。
- (一六五) 野間正二、前掲書、76。
- (一六六) 『グレート・ギャツビー』、75。
- (一六七) 同書、138。

- (二六八) 同書、109。
- (二六九) 野間、前掲書、79。
- (二七〇) 『グレート・キャッビー』、107。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.46.
- (二七一) 『グレート・キャッビー』、107—108。
- (二七二) 同書、112。傍線強調は論者。
- (二七三) 同書、112。
- (二七四) 同書、44。
- (二七五) 同書、113。
- (二七六) 同書、112。
- (二七七) 同書、112。
- (二七八) 同書、112。傍線強調は論者。
- (二七九) 同書、110。
- (二八〇) 同書、111。
- (二八一) 同書、247。傍線強調は論者。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.106.
- (二八二) 同書、219。
- (二八三) 同書、220。
- (二八四) 同書、219—220。
- (二八五) 同書、235。
- (二八六) 同書、245。
- (二八七) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.9。傍線強調は論者。
- (二八八) 野間正二、前掲書、93。
- (二八九) 『グレート・キャッビー』、86。傍線強調は論者。
- (二九〇) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.20.

- (一九一) 『グレート・ギャツビー』、156。
- (一九二) 同書、170。
- (一九三) 同書、201。
- (一九四) 同書、222。
- (一九五) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.19. 傍線強調は論者。
- (一九六) 『グレート・ギャツビー』、148。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.63. 傍線強調・イタリック強調は論者。
- (一九七) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, pp.85-86. 和訳・傍線強調・イタリック強調は論者。
- (一九八) *ibid.*, p.86。
- (一九九) *ibid.*, p.86。
- (二〇〇) *ibid.*, p.86。
- (二〇一) *ibid.*, p.86。
- (二〇二) *ibid.*, p.86。
- (二〇三) 『グレート・ギャツビー』、177—178。傍線強調は論者。
- (二〇四) 同書、139。
- (二〇五) 同書、140。
- (二〇六) 同書、271。
- (二〇七) 同書、238。傍線強調は論者。
- (二〇八) 同書、142—143。
- (二〇九) 同書、143。
- (二一〇) 同書、145。
- (二一一) 同書、241—242。
- (二一二) 同書、240—241。
- (二一三) 同書、241。傍線強調は論者。

- (一一四) 同書 161。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.68.
- (一一五) 同書 170。
- (一二六) 同書 172。傍線強調は論者。
- (一二七) 同書 11。
- (一二八) 同書 170。
- (一二九) 同書 275。
- (一二一〇) 同書 F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, pp.86-87. 傍線強調は論者。
- (一二一一) 同書 202。
- (一二一二) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.87. 傍線強調は論者。
- (一二一三) *ibid.*, p.86.
- (一二一四) *ibid.*, p.86.
- (一二一五) *ibid.*, p.87.
- (一二一六) 『グレート・ギャツビー』, 271。
- (一二一七) 同書 268—269。傍線強調は論者。
- (一二一八) 同書 269。傍線強調は論者。
- (一二一九) 同書 11。
- (一二二〇) 同書 180。
- (一二二一) 同書 181。
- (一二二二) 同書 121。
- (一二二三) 同書 182。
- (一二二四) 同書 182。
- (一二二五) 同書 185。
- (一二二六) 同書 312。

- (二三七) 同書、270—271。傍線強調は論者。
- (二三八) 同書、184。
- (二三九) 同書、268。傍線強調は論者。
- (二四〇) 同書、268。
- (二四一) 同書、267。
- (二四二) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.117.
- (二四三) 『グレート・ギャングス』、24。
- (二四四) 同書、178。
- (二四五) 同書、218—219。傍線強調は論者。
- (二四六) 同書、220。
- (二四七) 同書、222。
- (二四八) 同書、167。傍線強調は論者。
- (二四九) 同書、177—178。傍線強調は論者。
- (二五〇) 同書、148。傍線強調は論者。
- (二五一) 野間正二、前掲書、238。
- (二五二) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.71.
- (二五三) 『グレート・ギャングス』、197。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.71.
- (二五四) 同書、167。
- (二五五) 同書、154。
- (二五六) 野間正二、前掲書、238—239。
- (二五七) 『グレート・ギャングス』、297。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.117.
- (二五八) 同書、11。
- (二五九) 同書、268。

- (一六〇) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.17.
- (一六一) 『グレート・ギャツビー』, 173。傍線強調は論者。
- (一六二) 同書, 173。
- (一六三) 同書, 267。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, pp.115-116.
- (一六四) 同書, 120。
- (一六五) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.95.
- (一六六) 『グレート・ギャツビー』, 239。傍線強調は論者。
- (一六七) 同書, 259。
- (一六八) 同書, 261。
- (一六九) 同書, 263。
- (一七〇) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.114.
- (一七一) *ibid.*, p.114. 傍線強調, イタリック強調は論者。
- (一七二) 『グレート・ギャツビー』, 266。
- (一七三) 同書, 267。
- (一七四) 『グレート・ギャツビー』, 237。
- (一七五) 同書, 237。
- (一七六) 同書, 274。
- (一七七) F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.119.
- (一七八) 『グレート・ギャツビー』, 274。
- (一七九) 同書, 277。
- (一八〇) 同書, 280。
- (一八一) 同書, 174。
- (一八二) 同書, 299。

- (二八三) 同書、277。傍線強調は論者。
 (二八四) 同書、279。
 (二八五) 同書、280。
 (二八六) 同書、314。
 (二八七) 同書、296。
 (二八八) 同書、296。傍線強調は論者。
 (二八九) 同書、186。
 (二九〇) 同書、191。
 (二九一) 同書、200—201。傍線強調は論者。
 (二九二) 同書、273—274。
 (二九三) 同書、318。
 (二九四) 同書、322。
 (二九五) 同書、322。
 (二九六) 同書、322。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.139.
 (二九七) 同書、109—110。
 (二九八) 同書、112。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.48。傍線強調、イタリックは論者。
 (二九九) 同書、111。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.48。
 (三〇〇) 同書、320。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.138。
 (三〇一) 同書、322。F.Scott FITZGERALD, *ibid.*, p.140。
 (三〇二) 同書、300。
 (三〇三) 同書、325。